

私 訳

『コリントの信徒のみなさんへ 第一』私訳(Ⅲ)

阿 部 包

前号(第12号)に掲載した『コリントの信徒のみなさんへ 第一』(Ⅱ)に続いて、その(Ⅲ)を掲載する。今回は12章から16章までであり、今回の掲載をもってこの手紙の私訳は完結する。今回掲載する部分の小見出しを列記すると、〈霊の賜物について〉、〈多くの部分でも一つのからだ〉、〈愛〉、〈異言と預言〉、〈すべては秩序のうちに〉、〈キリストの復活〉、〈死者の復活〉、〈復活のからだ〉、〈聖なる人々のための募金〉、〈旅行の計画〉、〈最後の勧告と挨拶〉となる。

今回の部分で一般に最もよく知られているのは、13章のいわゆる「愛の賛歌」であろう。しかし、その他にも、重要な個所が少なくない。12章12節以下(〈多くの部分でも一つのからだ〉)は、われわれのからだを比喻として用いながら、教会を「キリストのからだ」として描く興味深い箇所である。また、14章以下(〈異言と預言〉、〈すべては秩序のうちに〉)は、いかなる賜物も「キリストのからだ」である教会を建設するために用いよと勧告する実際的な個所である。さらに、15章以下(〈キリストの復活〉、〈死者の復活〉、〈復活のからだ〉)は、キリストの復活に関する最古の伝承を今に伝え、同時に世界に死をもたらしたアダムと命をもたらしたキリストという対比を打ち出す。16章初めは、エルサレム(使徒)会議の席で指示されたエルサレム教会の〈聖なる人々のための募金〉に関する依頼を記す。

この募金は、2コリント9章で、改めて取り上げられる問題である。

なお、翻訳に際して心がけた原則は、従来の「私訳」のとおりで、ギリシア語原文と対照しながら読んで分かりやすいこと、また、日本語としても自然に論理展開を追うことができること(すなわち、ギリシア語

原文の文章の流れや論理展開を重視し、可能な限り元のギリシア語の文章の順番どおり訳出した）である。訳注に関しても従来 방식을踏襲し、ページ毎の脚注形式で、必要最小限にとどめた。

なお、翻訳に当たって参照した主な文献に限って、次に挙げておく。

原文

- ・NESTLE-ALAND, *NOVUM TESTAMENTUM GRAECE*, Ed. XXVII, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1993.
- ・Alfred Rahlfs, *SEPTUAGINTA. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*. Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1977.

辞書・コンコーダンス

- ・岩隈直『増補・改定 新約ギリシア語辞典』山本書店, 2006 年（初版 1971 年）。
- ・Bauer-Aland, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments*, 6., völlig neu bearbeitete Auflage, Walter de Gruyter, 1988.
- ・荒井献・H. J. マルクス（監修）『ギリシア語 新約聖書積義辞典』教文館（Ⅰ：1993 年，Ⅱ：1994 年，Ⅲ：1995 年）。
- ・LIDDEL & SCOTT, *A Greek-English Lexicon*, revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones, OUP, 1983 (1843¹).
- ・*Computer-Konkordanz zum Novum Testamentum Graece*, Walter de Gruyter, 1980.

翻訳

- ・協会訳：『聖書』日本聖書協会, 1975 年（旧約 1955 年改訳，新約 1954 年改訳）。
- ・バルバロ訳：『口語訳 旧約新約 聖書』ドン・ボスコ社, 1968 年（第 4 版。初版 1964 年。翻訳者：バルバローデル・コル）。
- ・新改訳：『聖書 新改訳 注・引照付』日本聖書刊行会, 1973 年。
- ・フランシスコ会聖書研究所訳：『聖書 原文校訂による口語訳 パウロ書簡 第二巻 コリント人への第一の手紙，コリント人への第二の手紙』中央出版社（現サンパウロ），1977 年。

- ・前田訳：『新約聖書 前田護郎訳』中央公論社，1983 年。
- ・柳生訳：『新約聖書 柳生直行訳』新教出版社，1994 年（第一版第 5 刷。第一刷 1985 年）。
- ・新共同訳：『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会，2003 年（初版 1987 年）。
- ・青野訳：『新約聖書翻訳委員会訳 新約聖書』岩波書店，2004 年（このうちの「パウロ書簡」部分：青野太潮訳）。
- ・田川訳：田川健三 訳著『新約聖書 訳と注 3 パウロ書簡 その一』作品社，2007 年（この巻は，1 テサロニケ，ガラテヤ，1 コリント，2 コリントを収録）。
- ・本田訳：本田哲郎訳『コリントの人々への手紙』新世社，2004 年（第 2 版。初版 2000 年）。
- ・NRSV: Bruce M. Metzger and Roland E. Murphy (eds.), *The New Oxford Annotated Bible. New Revised Standard Version*, OUP, 1991 (1973¹).
- ・Donald Senior (General Editor), *The Catholic Study Bible. The New American Bible*, OUP, 1990.

その他

- ・C. K. Barrett, *The First Epistle to the Corinthians*, Harpers New Testament Commentaries, Harper and Row, 1968.
- ・Gordon D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians*, The New International Commentary on the New Testament, William B. Eerdmans Publishing Company, 1987.
- ・David M. Hay (ed.), *Pauline Theology Vol. II: 1 & 2 Corinthians*, Fortress Press, 1993.
- ・Jerome Murphy-O'Connor, O. P., *St. Paul's CORINTH. Texts and Archaeology*, 3rd. Revised and Expanded Edition, The Liturgical Press, 2002.
- ・John D. Crossan and Jonathan L. Reed, *In Search of Paul. How Jesus's Apostle Opposed Rome's Empire with God's Kingdom. A New Vision of Paul's Words & World*, HarperSanFrancisco, 2004.
- ・Daniel N. Schowalter and Steven J. Friesen (eds.), *Urban Religion*

in Roman Corinth. Interdisciplinary Approaches, H. U. P., 2005.

- Bruce J. Malina and John J. Pilch, *Social-Science Commentary on the Letters of Paul*, Fortress Press, 2006.

12

〈霊の賜物について〉

1 さて、霊の賜物について⁴³⁴ は、兄弟のみなさん、あなたがたに知らずにいてほしくありません⁴³⁵。2 ご承知のとおり⁴³⁶、あなたがたは、異邦人だったとき、もの言わぬ偶像のところへ、導かれるようにして、連行されていました⁴³⁷。3 だから、わたしはあなたがたに知らせます。神の霊において語る人は誰も、決して「イエスは呪われよ」⁴³⁸ とは言いませんし、また、誰も聖霊においてでなければ⁴³⁹、「イエスは主である」と言う⁴⁴⁰ ことはできないのです。

⁴³⁴ 「霊の賜物について」と訳したのは、Peri… tōn pneumatikōn。直訳は「霊的なものについて」。

⁴³⁵ 「わたしは、あなたがたに知らずにいてほしくありません」と訳したのは、ou thélō hymās agnoeîn。ローマ 1 : 13, 11 : 25, 1 コリント 10 : 1, 2 コリント 1 : 8, 1 テサロニケ 4 : 13 にも同じ言い回しが出る。いわば、パウロの定型句。

⁴³⁶ 「ご承知のとおり」と訳したのは、Oídate。原文の語順を生かすための措置。

⁴³⁷ 「もの言わぬ偶像のところへ、導かれるようにして、連行されていました」と訳したのは、prōs tā eidōla tā áphōna hōs ân ēgesthe apagómenoi。この部分は文法的に整っていない。私訳の推測は次のとおり。prōs tā eidōla tā áphōna と言ったところで、単に ēgesthe ではなく、hōs ân ēgesthe と言ったため、最後は定動詞ではなく分詞 apagómenoi としてしまった。文法的には、apagómenoi に ēte (eimí の未完了過去, 2 人称, 複数) を補って読むことになるが、ēte は prōs の直前に既に出ているので、むしろ省略した方が語呂がよい。写本による読みの違い、注解者たちの解釈、また、可能性のある二つの読み等、詳しくは、田川、前掲書、342～345 頁、参照。また、ハバクク 2 : 18, 詩編 115 : 4～8, 3 マカバイ 4 : 16, 使徒言行録 17 : 29, 参照。

⁴³⁸ 「イエスは呪われよ」は、Anáthema Iēsoûs。

⁴³⁹ 「聖霊においてでなければ」と訳したのは、ei mē en pneúmati hagíōi。この句は、原文では Kyrios Iēsoûs 「イエスは主である」の後、すなわち、文末に来ている。

⁴⁴⁰ 「『イエスは主である』と言う」と訳したのは、eipeîn Kyrios Iēsoûs。ローマ 10 : 9 にも、eân homologēsēs en tōi stómati sou kyriōn Iēsoûn 「あなたの口でイエスを主（イエスは主である）と告白するならば」という句が出る。われわれの箇所を直接話法、ローマの当該箇所を間接話法と考えるとよ

4 賜物には違いがありますが、霊は同じです⁴⁴¹。5 また、奉仕にも⁴⁴² 違いがありますが、主は同じです⁴⁴³。6 また、働きにも⁴⁴⁴ 違いがありますが、すべてのことにおいてすべてを働かれる神は同じです⁴⁴⁵。7 また、各自に霊の顕現⁴⁴⁶ が与えられていますが、それは役に立つためなのです⁴⁴⁷。8 実際、ある人には、霊をとおして知恵の言葉⁴⁴⁸ が与えられ、他の人には知識の言葉⁴⁴⁹ が同じ霊に従って、(また)別の人には、信仰が同じ霊において、他の人には癒しの賜物⁴⁵⁰ がその一つの霊において⁴⁵¹、10 また他の人には力の働き⁴⁵² が、[また]他の人には預言が、[また]他の人には霊の識別⁴⁵³ が、別の人には種々の異言が、他の人には異言の解釈⁴⁵⁴ が (与えられています)。11 しかし、これらすべてのことを、ただ

い。

⁴⁴¹ 「賜物には違いがありますが、霊は同じです」と訳したのは、Diairéseis dē charismátōn eisín, tò dē autō pneūma. chárisma (ここでは、複数形)「賜物、恵みの贈物、恵みの賜物」<charízomai「恵みを与える、恵む、下賜する、賜う」<cháris「恵み、恩恵、好意、感謝」。tò dē autō pneūma は、「あるのは、同じ霊です」とも訳し得る。「恵みの賜物」(青野訳、田川訳)。協会訳は、1 節の tà pneumatiká (原文では perì tōn pneumatikōn) とほぼ同義であることを表すために、ここも「霊の賜物」としている。

⁴⁴² 「奉仕にも」は、diakoniōn。

⁴⁴³ 「主は同じです」は、ho autōs kyrios。「おられるのは、同じ主です」とも訳し得る。

⁴⁴⁴ 「働きにも」は、energēmátōn。

⁴⁴⁵ 「すべてのことにおいてすべてを働かれる神は同じです」と訳したのは、ho …autōs theōs ho energōn tà pánta en pāsin。「…働かれるのは同じ神です」とも訳し得る。

⁴⁴⁶ 「霊の顕現」と訳したのは、hē phanérōsis toū pneūματος。個々の異なった賜物として、霊が各自に顕れることを指している。

⁴⁴⁷ 「それは役に立つためなのです」と訳したのは、prōs tò symphèron. tēi ekklesíāi ya tēi oikodomēi を補って考えると分かりやすい。

⁴⁴⁸ 「知恵の言葉」は lōgos sophías。

⁴⁴⁹ 「知識の言葉」は、lōgos gnōseōs。

⁴⁵⁰ 「癒しの賜物」は、charismata iāmátōn。

⁴⁵¹ 「その一つの霊において」と訳したのは、en tōi henì pneūmati。

⁴⁵² 「力の働き」は、energēmata dynámeōn。奇跡の力の働き、つまり、奇跡を行なう力のこと。

⁴⁵³ 「霊の識別」は、diakríseis pneumátōn。様々な霊を識別する力のこと。

一つの同じ霊⁴⁵⁵が働いて、望むがままに、一人ひとりに別々に分け与えてくれる⁴⁵⁶のです。

〈多くの部分でも一つのからだ〉

12 実際、ちょうど、からだは一つであっても多くの部分⁴⁵⁷を持ち、また、すべてからだの部分は多いのに一つのからだであるように⁴⁵⁸、キリストもまたそうです。13 なぜなら、一つの霊においてわたしたちは皆、一つのからだになるために洗礼を受けた⁴⁵⁹からであり、ユダヤ人であれギリシア人であれ、奴隷であれ自由人であれ、わたしたちは皆、一つの霊を飲ませてもらった⁴⁶⁰からです。14 実際、からだは一つの部分ではなく、多くの部分です。15 もし、足が「わたしは手ではないから、からだの一部ではない」と言っても、それによって（足が）からだの一部でなくなることはないでしょう？⁴⁶¹ 16 また、もし、耳が「わたしは目

⁴⁵⁴ 「異言の解釈」は、hermēnefā glōssōn。なお、glōssa は「舌」を意味し、そこから「言葉」や「異言」を意味するようになった。

⁴⁵⁵ 「ただ一つの同じ霊」と訳したのは、hēn kai tō autō pneūma。

⁴⁵⁶ 「望むがままに、一人ひとりに別々に分け与えてくれる」と訳したのは、diairoūn idīāi hekāstōi kathōs bouletai。diairoūn < diairēō 「分ける、分け与える、分配する」。分詞、中性、主格。「別々に」は idīāi。ローマ 12：3、参照。

⁴⁵⁷ 「部分」と訳したのは、mēlē。従来は、しばしば「肢体」と訳されてきた（協会訳、バルバロ訳、青野訳、田川訳）。「シタイ」という発音は、先ず「死体」を想起させる。聞いて、からだの部分を目指す「肢体」を思い浮かべる人は、まずいないだろう。「部分」とするのは、新改訳、フランススコ会聖書研究所訳、前田訳、新共同訳、本田訳、柳生訳。このくだりは、内容的にローマ 12：4 と対応している。

⁴⁵⁸ 「ちょうど、…ように、…そうです」と訳したのは、Katháper…，hoútōs …という原文の対応。このくだりは、ローマ 12：5 と対応している。

⁴⁵⁹ 「一つのからだになるために洗礼を受けた」と訳したのは、eis hēn sōma ebaptisthēmen。もちろん、洗礼を受けて一つのからだになったのだ、というニュアンスもある。ebaptisthēmen < baptizō 「水に浸ける、洗礼を授ける」。1 aor. 受動相、1 人称、複数。文末の動詞も同じく、1 aor. 受動相、1 人称、複数。epotisthēmen < potizō 「飲む」。

⁴⁶⁰ このくだりは、内容的にガラテヤ 4：28 と対応している。

⁴⁶¹ 「そのことによって（足が）からだの一部でないということにはならないで

ではないから、からだの一部ではない」と言っても、それによって（耳が）からだの一部ではなくなることはないでしょう？ 17 もし、からだ全体が目だったら、どこで聴きますか⁴⁶²。もし、全体が聴くことになったら⁴⁶³、どこで臭いを嗅ぎますか⁴⁶⁴。18 しかし、実際には⁴⁶⁵、神は諸々の部分を、すなわち、それらの一つひとつを⁴⁶⁶、ご自分が望まれたとおりに⁴⁶⁷、からだの中に置かれました。19 しかし、もし、全部が⁴⁶⁸一つの部分であったとすれば、どこにからだはあるのでしょうか。20 しかし、実際は⁴⁶⁹、部分は多くて、からだは一つ⁴⁷⁰なのです。21 目が手に向かって「わたしにはお前など要らない」と言うことはできませんし、あるいはまた、頭が両足に向かって「わたしはお前たちなど要らない」と（言うこともできません）。22 むしろ、かえって、からだの中で他よりも弱いと思

しょう？」と訳したのは、*oũ parà toũto oũk éstin ek toũ sōmatos*; という疑問文。訳文としては、疑問符をつけないと疑問文か平叙文か区別がつかないので、疑問符をつけた。

⁴⁶² 「どこで聴きますか」と訳したのは、*poũ hē akoē*。直訳すると「聴くことは、どこで（するの）か？」*akoē* は「聴くこと、聴覚」。

⁴⁶³ 「もし、全体が聴くことになれば」と訳したのは、*ei hólōn akoē*。もちろん、*hólōn* の後には *tō sōma* が隠れている。

⁴⁶⁴ 「どこで臭いを嗅ぎますか」と訳したのは、*poũ hē ósphrēsis*。 *ósphrēsis* は、*hapaxlegomenon* で、「臭いを嗅ぐこと、嗅覚」。

⁴⁶⁵ 「しかし、実際には」と訳したのは、*nynì dē*。 *nynì* は *nyn* の強意形。

⁴⁶⁶ 「諸々の部分を、すなわち、それらの一つひとつを」と訳したのは、*tà mēlē, hēn hēkastōn autōn*。 *tà mēlē* という複数形は、やはり「諸々の部分」と若干説明的に訳さざるを得ない。パウロは、*tà mēlē* と言って、直ぐに、それをより詳しく *hēn hēkastōn autōn* と言い換えたわけである。

⁴⁶⁷ 「ご自分が望まれたとおりに」と訳したのは、*kathōs ēthēlēsen. ēthēlēsen < thēlō* 「望む、欲する」。1 aor. 3人称、単数。15:38にも同じ句が出てくる。

⁴⁶⁸ 「全部が」と訳したのは、*tà pánta*。読んで分かるとおり、17節と19節、18節と20節の意味上の対応関係から、この *tà pánta* は *tà pánta mēlē* である。つまり、目の集合体、耳の集合体を想像するとよい。

⁴⁶⁹ 「しかし、実際は」と訳したのは、*nyn dē*。18節冒頭の *nynì dē* と同じ意味。

⁴⁷⁰ 「部分は多くて、からだは一つ」と訳したのは、*pollà mēn mēlē, hēn dē sōma*。なお、読んで分かるように、17節と19節、18節と20節がそれぞれ対応している。

われている部分の方が⁴⁷¹ 必要なのです。23 また、からだの中で他よりも賤しいとわたしたちが思っている⁴⁷² まさにその部分に、わたしたちはより多くの尊厳を与えます⁴⁷³ が、その結果⁴⁷⁴、わたしたちの下品な部分⁴⁷⁵ が実はより多くの上品さを持つことになります。24 しかし、あなたがたの上品な部分はその必要がありません。ところが、神はより劣っている部分に尊厳を与えることによって⁴⁷⁶ 体をついにまとめられた⁴⁷⁷ のです。25 それは、からだの中に分裂が生じることなく⁴⁷⁸、諸々の部分がお互いのために同じように配慮する⁴⁷⁹ ためです。26 それで、ある[一つの]部

⁴⁷¹ 「からだの中で他よりも弱いと思われる部分の方が」と訳したのは、*tà dokoũnta mēlē toũ sōmatos asthenéstera hypárchein*。最後に出る *hypárchein* は、*eínai* とほとんど同じ意味で使われる例。

⁴⁷² 「からだの中で他よりも賤しいとわたしたちが思っている」と訳したのは、*dokoũmen atimótera eínai toũ sōmatos*。アリストテレス、『動物部分論』*De partibus animalibus*, 672b21, 「自然は……体を貴い部分と賤しい部分と (*tò timiōteron kai tò atimiōteron*) に分離した。」島崎三郎訳、『動物誌 下・動物部分論』(アリストテレス全集8), 岩波書店, 354 頁, 参照。

⁴⁷³ 「まさにその部分に、わたしたちはより多くの尊厳を与えます」と訳したのは、*ha …… toutois timēn perissoterān peritithemenō*。

⁴⁷⁴ 「その結果」と訳したのは、*kai*。

⁴⁷⁵ 「わたしたちの下品な部分」と訳したのは、*tà aschēmona hēmōn*。*tà aschēmona* は、「陰部、恥部」を含意する。「下品な部分」と訳したのは、続いて出る *euschēmosynēn* 「上品さ」や次の 24 節に出る *euschēmona* 「上品な部分」との対比を明瞭にするため。

⁴⁷⁶ 「より劣っている部分に価値を与えることによって」と訳したのは、*tōi hysterouménōi perisso- tērān doūs timēn*。*doūs* < *dídōmi* 「与える」。2 aor. 分詞, 男性, 単数, 主格。

⁴⁷⁷ 「からだを一つにまとめられた」と訳したのは、*synekérasen tò sōma*。*synekérasen* < *syn-keránnymi* 「混ぜ合わせる, 組み合わせる」。1 aor. 3 人称, 単数。なお, *keránnymi* は, *kerameús* 「陶器職人, 陶工」, *keramikós* 「土の, 陶製の, 陶工の作った」, *kerámion* 「陶器, 瓶, 壺, かめ」, *kéramos* 「粘土, 陶土, 粘土で作ったもの, 瓦」などと同族語。いわゆる *ceramic* の語源。

⁴⁷⁸ 「からだの中に分裂が生じることなく」と訳したのは、*mē ēi schísma en tōi sōmati*。直訳は「からだの中に分裂が存在することなく」。

⁴⁷⁹ 「諸々の部分がお互いのために同じように配慮する」と訳したのは、*tò autò hypēr allēlōn merimnōsin tà mēlē*。*tò autò* 「同じように」(副詞的用法)。

分が⁴⁸⁰ 苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、ある [一つの] 部分が讃えられれば⁴⁸¹、すべての部分がともに喜ぶのです。27 あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりが⁴⁸² その部分なのです。28 そこで、様々な人を神は教会の中に置かれたのです。すなわち、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に力ある業、次に癒しの賜物、援助⁴⁸³、舵取り⁴⁸⁴、種々の異言⁴⁸⁵ です。29 すべての人が使徒でしょうか。すべての人が預言者でしょうか。すべての人が教師でしょうか。すべての人が力ある業でしょうか⁴⁸⁶。30 すべての人が癒しの賜物を持っているでしょうか。すべての人が異言によって語るでしょうか。すべての人が解釈するでしょうか。31 むしろ⁴⁸⁷、あなたがたは、もっと大きな賜物を

法)。merimnōsin<merimnāō「配慮する」、現在、接続法、3人称、複数。よくあることだが、主語が文末に来ている。なお、25 節の内容については、ローマ 12:5 (「大勢であってもわたしたちはキリストにあって一つの体であり、一人ひとり互いに部分だからです。」)、参照。

⁴⁸⁰ 「ある [一つの] 部分が」と訳したのは、[hèn] mélos。

⁴⁸¹ 「讃えられれば」と訳したのは、eíte …… doxázetai. doxázō「褒め称える、讃える、讃美する、栄光を帰する」。

⁴⁸² 「一人ひとりが」と意識したのは、ek mérous。「部分として見れば、一つひとつを取って見れば、一人ひとりを取って見れば」。「全体を便宜上分けて、部分として見れば」のニュアンス。私訳では mélos, mēlē を一貫して「部分、(諸々の) 部分」と訳しているの、このように、mēlē ek mérous と mēlē と mēlē が並んで出の場合にはできれば別な訳語を用いたい。

⁴⁸³ 「援助」は、antilēmpseis. antilēmpsis<antilambānō「助ける、世話する、援助する」。従って、「手助け、世話、援助」。

⁴⁸⁴ 「舵取り」は、kybernēseis. kybernēsis<kybernāō「舵を取る (操る)」。ちなみに、kybernētēs「舵手、船長」。「舵取り」(田川訳)。

⁴⁸⁵ パウロは、didaskalous「教師」まで列挙した後、épeita「次に」と言って、人ではなく賜物を列挙している。厳密に言えば、人と賜物を同列に扱うのは、妙なやり方であるが、敢えてそのまま訳した。田川、351 頁の説明を参照。

⁴⁸⁶ 29~30 節は、列挙の仕方において、28 節と若干の違いがある。使徒、預言者、教師と続くのは同じだが、28 節で賜物として挙がっていたもののうち dynámeis「力ある業」はそのままの形であるのに対して、続く charísmata iāmātōn「癒しの賜物」には échousin「持っている」が挿入され、génē glōssōn「種々の異言」は glōssais laloûsin「異言によって語る」に替わっている。

⁴⁸⁷ ここで「むしろ」と訳したのは、dē。

熱心に求めなさい⁴⁸⁸。

〈愛〉

そこで、わたしは、さらにもっと卓越した道を⁴⁸⁹ あなたがたに示しましょう。

13 1 たとえ、わたしが人間の異言によって、また、御使いたちの（異言によって）語っても、愛を持っていなければ、鳴り響く銅鑼⁴⁹⁰、喧しいシンバルになってしまいます。2 また、たとえ、わたしが預言する力を⁴⁹¹ 持ち、あらゆる神秘、あらゆる知識を会得していても⁴⁹²、また、たとえ、山を移すほどの完全な信仰を持っていても⁴⁹³、愛を持っていなか

⁴⁸⁸ 「あなたがたは、もっと大きな賜物を熱心に求めなさい」と訳したのは、*zēloūte…tā charisma-ta tā meizonā*。ここでパウロが「もっと大きな賜物」と呼んでいるのは、次章で謳い上げられる「愛」である（通称「愛の賛歌」）。

⁴⁸⁹ 「さらにもっと卓越した道を」と訳したのは、*éti kath' hyperbolēn*。副詞の *éti* は、ここでは、時間ではなく程度を表す用法。*hyperbolē* < *hyperbállō* 「越える、凌駕する、優る」。*kath' hyper-bolēn* で、副詞的にも形容詞的にも用いられ、前者は「過度に、ふんだんに、溢れるほどに」などを、後者は「並外れた、卓越した、遥かに優れた、溢れるほどの」などを、それぞれ意味する。

⁴⁹⁰ 「鳴り響く銅鑼」と訳したのは、*chalkōs ēchōn*。*chalkós* が具体的に何を指すか、定かではない。明らかなのは、銅製の道具であること。従来訳語は「銅鑼」が主流。田川訳は「鉢」。

⁴⁹¹ 「預言する力を」と訳したのは、*prophētefān*。

⁴⁹² 「あらゆる神秘、あらゆる知識を会得していても」と訳したのは、*eàn …… eidō tā mystēriā pānta kai pāsan tēn gnōsin*。*mystēriā* は「神秘、秘儀、秘義、奥義」。*eidō* < *oīda* 「(よく) 知っている、心得ている、会得している、通じている」。

⁴⁹³ 「たとえ、山を移すほどの完全な信仰を持っていても」と訳したのは、*eàn échō pāsan tēn pístin hōsthe órē methistānai*。次の言葉を参照。*hōs an eípēi tōi órei toútōi' árthēti kai blēthēti eis tēn thálassan, kai mē diakrithē, en tēi kardfāi autoū allā pisteúēi hōti hō laleī ginetai, éstai autōi*。「誰でもこの山に向かって、『立ち上がって海に飛び込め』と言い、心のなかで疑いを抱かずに、自分の言ったとおりになると信じるならば、実際にそうなる。」(マルコ 11:23)。*eàn échēte pístin hōs kōkkon sinápeōs, ereíte tōi órei toútōi' metabā énthēn ekeī, kai metabēsetai' kai oudēn adyna-*

れば、わたしは何ものでもありません⁴⁹⁴。3 また、わたしの全財産を食物に換えて施しても⁴⁹⁵、また、わたしのからだを焼かれるために引き渡しても⁴⁹⁶、愛を持っていなければ、わたしは何の役にも立ちません。

4 愛は忍耐強い。情け深いものです、愛は⁴⁹⁷。妬まず、[愛は]自慢せ

tēsei hymîn. 「もし、あなたがたが辛子種一粒ほどの信仰を持っていれば、この山に向かって、『ここからあそこに移れ』と命じれば、移るだろう。あなたがたにできないことは何一つない。」(マタイ 17:20)。

⁴⁹⁴ 「わたしは何ものでもありません」と訳したのは、outhén eimi. 少なくとも、これについては「無に等しい」(バルバロ訳)、「わたしは無に等しい」(協会訳)は名訳。新共同訳がそのまま採用したのも頷ける。他に、「わたしは無です」(前田訳)、「私は無である」(青野訳)、「わたしの存在は無意味です」(本田訳)、「私は何でもない」(田川訳)、「わたしにはなんの取柄もない」(柳生訳)。私訳はフランシスコ会聖書研究所訳に同じ。

⁴⁹⁵ 「また、わたしの全財産を食物に換えて施しても」と訳したのは、kân psōmísō pánta tã hypár-chonta mou. psōmísō < psōmizō 「食べ物を少しずつ口に入れてやる」(Liddell & Scott には、"*feed by putting little bits into the mouth, as nurses do to children*" とある。なお、LXX 訳民数記 11:4 に、kai hoi hyioi Israēl kai eīpan Tis hēmās psōmiei krēa; emnēsthēmen toūs ichthyās, hoūs ēsthōmen en Aīgyptōi dōreān, kai toūs sikyās kai toūs péponas kai tã prasa kai tã krómmya kai tã skórda. 「イスラエルの子らも言った。『誰か、われわれに肉を食べさせてくれないだろうか。思い返せば、われわれはエジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱、それにニンニクもそうだ。』という件がある。他に『十二族長の遺訓』の「レビの遺訓」9:5、参照。さらに、マタイ 6:2, hótan … poiēs eleēmosynēn, 「あなたが施しをするときには、」を参照。

⁴⁹⁶ 「わたしのからだを焼かれるために引き渡しても」と訳したのは、eân paradō tō sōmá mou hína kauthēsōmai. ただし、これは、ネストレ 25 版までの読みであって、その後の版の本文は kauthēsōmai 「焼かれる」(<kaiō 「焼く」)ではなく、kauchēsōmai 「誇る」(<kauchāomai 「誇る、自慢する」)を採用している。「全財産を食べ物に換えて施す」とこと併記されていることを考慮すれば、「焼かれる」方が文脈に合致している(両方とも自己犠牲)。写本上は、もう一つ kauthēsōmai という読みがある。critical apparatus の情報、さらに、Gordon D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians*, NICN, 1987, Eerdmans, pp. 629, 633-635, 参照。

⁴⁹⁷ 「愛は忍耐強い。情け深いものです、愛は。」と訳したのは、Hē agápē makrothymēi, chrēsteú-etai hē agapē. makrothymēō 「耐え忍ぶ、気長に待つ、辛抱強い」。makrós 「長い、遠い、遠く離れている」(形容詞)+thymós

ず⁴⁹⁸、威張らず⁴⁹⁹、5 恥ずべきことをせず⁵⁰⁰、自分自身のことを追い求めず、激昂せず⁵⁰¹、悪いことを数え上げず⁵⁰²、6 不正を喜ばず、真実とともに喜び⁵⁰³、7 すべてを我慢し⁵⁰⁴、すべてを信じ、すべてを希望し、

「怒り、憤怒、激怒」。基本的には、神がその怒りを押さえて辛抱強く待って下さっている期間に関する表現。chrēsteúomai「情け深い、恵み深い、親切である、誠実である」もまた、神の恵み深さをその基本的意味として持つが、聖書、キリスト教文献外には用例がない。chrēstótēs「慈しみ、寛大、恵み、親切、誠実」(名詞)同様、chrēstós「情け深い、恵み深い、親切な、誠実な」(形容詞)の派生語。

⁴⁹⁸ 「自慢せず」と訳したのは、oû perpereúetai. perpereúō < pérperos「自慢家、慢心家、法螺吹き」。この動詞は hapaxlegomenon。

⁴⁹⁹ 「威張らず」と訳したのは、oû physioútai。

⁵⁰⁰ 「恥ずべきことをせず」と訳したのは、oûk aschēmoneî. aschēmoneō「体裁が悪いことをする、みっともないことをする、さまにならないことをする、恥ずべきことをする」。自分が属する共同体(社会)がそう振舞うべきだとする一定の形(schēma)から逸脱した(a-)ことをする。田川訳が「さまにならないことをせず」。ただし、7:36の用例 aschēmoneîn …… nomízei「恥ずべきことだと思いながら」、12:23の用例 tã aschēmōna hēmōn「わたしたちの恥ずべき部分」、さらに、ローマ1:27の用例 ársenes en ársesin tēn aschēmosynēn katēgazόμενοι「男が男に恥ずべきことを行ない」との関連性を訳語に表したかった。

⁵⁰¹ 「激昂せず」と訳したのは、oû paroxynetai。

⁵⁰² 「悪いことを数え上げず」と訳したのは、oû logízetai tò kakón。この logízomai については、おそらく「商行為に際して価格や負債を客観的に『勘定する』ことを意味する」「商業的用語法の機能を考慮に入れるべきであろう。ニュアンスとしては、「相手から被った害(悪事)を一々勘定せず(数え上げず)」がぴったり。「人の悪事を数え立てない」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「悪を数え上げない」(田川訳)。「悪を気にせず」(バルバロ訳)、「人のした悪を思わず」(新改訳)はまだよいとして、従来の「恨みをいだかない」(協会訳)、「恨みを抱かない」(新共同訳)や「悪を考えず」(前田訳)、「悪しきことを企まず」(青野訳)、「人が悪に陥るのを喜ばず」(柳生訳)は、むしろ誤訳。

⁵⁰³ 「不正を喜ばず、真実とともに喜び」と訳したのは、oû cháfrei epì tēi adikīāi, syncháfrei dē tēi alētheíāi。喜ぶ(cháfrō)原因・理由・対象は en tīni, epì tīni で表される。syncháfrō が与格とともに用いられるのは、接頭辞 syn が元来与格支配の前置詞であることに基づく。

⁵⁰⁴ 「すべてを我慢し」と訳したのは、pánta stégei. stégō「蔽う、被う、蔽って守る、覆い隠す」、「我慢する、辛抱する」。派生語として stégē「屋根」。

すべてを耐え忍ぶ⁵⁰⁵ ものです。

8 愛は決して倒れません。預言であれば、廃れもしましょう。異言であれば、止みもしましょう。知識であれば、廃れもしましょう⁵⁰⁶。9 なぜなら、わたしたちが知るのも一部分、預言するのも一部分なのですから⁵⁰⁷。10 しかし、完全なものが到来するとき、部分的なものは廃れるのです⁵⁰⁸。11 わたしが幼児だったとき、わたしは幼児のように話し、幼児のように思い、幼児のように考えていました。大人になったとき、わたしは幼児のことを止めにした⁵⁰⁹ のです。12 実際、われわれは今、鏡をとおして謎の形で見ています⁵¹⁰ が、しかし、そのときには、顔と顔とを合わせて⁵¹¹ (見るのです)。今、わたしは一部分しか知りませんが、しかし、そのときには、完全に認識することになります⁵¹²。まさに (今) わ

⁵⁰⁵ 「すべてを耐え忍ぶ」と訳したのは, *panta hypoménei*. *hypō*「…の下に」+ *ménō* 「じつと留まる」。

⁵⁰⁶ 「預言」, 「異言」は, *prophēteiai*, *glōssai* でどちらも複数。「知識」だけが *gnōsis* で単数。ここは, *eīte …… eīte …… eīte ……* というリズムカルな言い回し。

⁵⁰⁷ 「なぜなら、わたしたちが知るのも一部分、預言するのも一部分なのですから」と訳したのは, *ek mérous gār ginōskomen kai ek mérous prophēteuomeno*。

⁵⁰⁸ 「完全なもの」と訳したのは *tō téleion*, 「部分的なもの」と訳したのは *tō ek mérous*。

⁵⁰⁹ 「幼児のことはやめにした」と訳したのは, *katērgēka tā toū nēpfou*。

⁵¹⁰ 「鏡をとおして謎の形で見ています」と訳したのは, *blépomen…árti di’ esóptrou en ainígmati*。直訳は「鏡をとおして謎において見ている」。*ésopton* 「鏡」は, こことヤコブ 1:23 にのみ出る。*ainigma* 「謎」は, 新約ではここにしか現れない, いわゆる *hapaxlegomenon*。LXX 訳民数記 12:8 に, 神がモーセについて, *stóma katà stóma lalēsō autōi, en eídei kai ou di’ ainigmátōn, kai tēn dóxan kyríou eíden* 「口から口へとわたしは彼と語ろう, 姿を現して謎によらずに。彼は主の栄光を見る。」と語る場面が出てくる。

⁵¹¹ 「顔と顔とを合わせて」と訳したのは, *prósōpon pròs prósōpon*。創世記 LXX 訳 32:31 に同じ句が出る。当該箇所は, ヤコブが何者かと格闘した末にイスラエルと改称される場面で, 彼が「わたしは, 顔と顔とを合わせて神を見たのに, わたしの命は救われた」と言って, その場所をベヌエル (神の顔) と名づけるくだりである。

⁵¹² 「しかし、そのときには、わたしが (今) 完全に認識されているのと同じよ

たしが完全に認識されている⁵¹³ のと同じように、です。 13 そういうわけで、いつまでも残るのは、信仰、希望、愛、これら三つですが、そのうち最大のもの⁵¹⁴ は愛です。

14

〈異言と預言〉

1 あなたがたは、愛を追い求めなさい。また、霊の賜物を熱心に求めなさい。しかし、それはむしろ、預言するためにしなさい。2 なぜなら、異言によって語る人は、人々に向かってではなく神に向かって語っており、また、誰一人聞く者もおらず、彼は霊に向かって⁵¹⁵ 神秘を語っているからです。3 しかし、預言する人は、人々に向かって、建設的なことを、そして勧めと励ましを語ります⁵¹⁶。4 異言によって語る人は自分自身を建てます⁵¹⁷ が、預言する人は教会を建てます。5 わたしはあなたが

うに、わたしは完全に認識することになる」と訳したのは、*tóte dē epignōsomai kathōs kai epegnōsthēn*。前半部に出る受動相は、いわゆる「神的受動」。

⁵¹³ 「(今) わたしが完全に認識されている」と訳したのは、*epegnōsthēn*。いわゆる「神的受動」。

⁵¹⁴ 「そのうち最大のもの」と訳したのは、*meizōn...touútōn*。この比較級を生かして説明的に訳すと、「これらのうち、他の二つよりも大きなもの」となるうか。

⁵¹⁵ 「霊に向かって」と訳したのは、*pneúmati*。同じ節の前半に出る「人々に向かって」*anthrōpois* や「神に向かって」*theōi* と同じ単純な与格と解した。田川、358 頁、参照。

⁵¹⁶ 「建設的なことを、そして勧めと励ましを語ります」と訳したのは、*laleī oikodomēn kai paráklēsin kai paramythíān*。*oikodomē* は、「建設、建設に役立つこと、造り上げること」、信徒の集合体としての教会を建設する上で役立つことを意味する。*paráklēsis* < *parakaléo* 「呼びかけて招く、勧める、諭す、励ます、慰める」。 *paramythíā* < *paramythēomai* 「激励する、鼓舞する、励ます、慰める」。

⁵¹⁷ 「自分自身を建てます」と訳したのは、*heautōn oikodomeī*。なお、次に出る「教会を建てます」は *ekklēsiān oikodomeī* の訳。12 節に、*prōs tēn oikodonēn tēs ekklēsiās* 「教会の建設に役立つように」という句が出てくる。

たが皆、異言によって語ることを望みますが、しかし、もっと望むのは、あなたがたが預言することです⁵¹⁸。預言する人の方が異言によって語る人よりも優っています。ただ、彼が解釈し、その結果、教会が建設を享受する⁵¹⁹ 場合は別です⁵²⁰。

6 そういうわけで⁵²¹、兄弟のみなさん、もし、わたしがあなたがたのところへ行つて異言によって語ったとしても、あなたがたの何の役に立つでしょうか。もし、わたしがあなたがたに、啓示か、知識か、預言か、あるいは教えか、それらのどれかによって語るのであれば⁵²²。7 音を出す命のないもの⁵²³ も同じこと⁵²⁴ です。笛にしても堅琴にしても、もし、諸々の音に区別を与えなければ⁵²⁵、どうして知られるのでしょうか、

⁵¹⁸ 「しかし、それ以上に望むのは、あなたがたが預言することです」と訳したのは、*mállon dē hína prophēteúēte*。この節の最初に位置する定動詞 *thélō* が *pántas hymās laleîn glōssais* という不定詞句と *hína prophēteúēte* という句に掛かっている。

⁵¹⁹ 「教会がその建設に役立つものを受けるために」と訳したのは、*hína hē ekklēsiā oikodomēn lābēi*。

⁵²⁰ 「場合は別です」と訳したのは、*ektōs ei mē*。直訳すると「…を除けば、…場合以外は」。いずれにせよ、パウロは、異言によって語る人が預言を語る人よりも優れているのは、教会の建設に役立つように、語った異言を他の人にも理解できるように解釈して語り直す場合だけだ、と主張している。

⁵²¹ 「そういうわけで」は、*Nyn dé* の訳。

⁵²² 「もし、わたしがあなたがたのところへ行き異言によって語ったとしても、あなたがたの何の役に立つでしょうか。もし、わたしがあなたがたに、啓示か、知識か、預言か、あるいは教えか、それらのどれかによって、語るののであれば」と訳したのは、*eân élthō prōs hymās glōssais lalōn, tí hymās ōphelēsō eân mē hymīn lalēsō ē en apokalypsei ē en gnōsei ē en prophētefā ē [en] didachēi*。いずれにしても、原文どおりの思考の流れで訳すのは不可能な箇所。

⁵²³ 「音を出す命のないもの」と訳したのは、*tà ápsycha phōnēn didōnta*。次に出る「笛や堅琴」という例から分かるとおり、楽器のこと。「命のない楽器」(新改訳)、「生命のない楽器」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「命のない楽器」(バルバロ訳、新共同訳)。

⁵²⁴ 「同じことです」と訳したのは、*hómōs*。写本によるアクセントの違いはないが、前後の文脈から、こう訳した。

⁵²⁵ 「諸々の音に区別を与えなければ」と訳したのは、*eân diastolēn toīs phthóngois mē dōi*。「諸々の音に」というのは、つまり、「複数の音と音の

笛で吹かれる調べや豎琴で弾かれる調べ⁵²⁶が。8 また、実際、もし、はっきりしない音をラッパが出したら、誰が戦闘のために身支度を整えるでしょうか。9 これと同じように、あなたがたも、その舌を使ってよく分かる言葉を発しなければ⁵²⁷、どうして、話されていることが知られるでしょうか⁵²⁸。なぜなら、あなたがたは空に向かって話すことになってしまうからです。10 世界には数え切れないほど多くの言語があります⁵²⁹が、音声のないもの⁵³⁰は一つとしてありません。11 だから、もし、わた

間に」ということである。それに区別を与えるというのは、いわゆる、音階に従って、高低様々な音を出すというに等しい。

⁵²⁶ 「笛で吹かれる調べや豎琴で弾かれる調べ」と訳したのは、tò auloúmenon ē tò kitharizṓmenon。言わんとしているのは、おそらく曲の調べのことであろうから、こう訳した。つまり、多くの音が区別されて耳に届かなければ、音楽として認識されないということだろう。「何を吹いているのか、弾いているのか」(協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳)、「何を吹いているのか、何をひいているのか」(新改訳)、「何を吹き、何を弾いているのか」(新共同訳)、「吹かれたり、弾かれたりしている音色」(田川訳)、「笛が吹かれているとか、豎琴が奏でられているとか」(青野訳)。青野訳は直訳のようでいて、パウロの言わんとしていることから外れているように思う。聞こえてくるのが、笛の音が豎琴の音か、という点が問題にされているわけではない。

⁵²⁷ 「その舌を使ってよく分かる言葉を語らなければ」と訳したのは、dià tēs glōssēs eān mē eúsēmon lōgon dōte。「舌」は、単語としては「異言によって語る」と訳した句で用いられる「異言」と同じ glōssa であるが、定冠詞が付いた単数形。eúsēmos という形容詞は、eu「よい」+sēma「しるし」に由来し、「明瞭な、明確な、はっきりした、分かりやすい」を意味する。lōgon didōmi「言葉を与える」を「言葉を発する」とした。

⁵²⁸ ここはほぼ直訳。日本語表現の慣例では、むしろ、「話していることを知ってもらえるでしょうか」と訳したいところ。

⁵²⁹ 「世界には数え切れないほど多くの言語があります」と訳したのは、tosaūta ei tychoi gênē phōnōn eisin en kōsmō. ei tychoi は、ヘレニズム時代に発達した慣用句で、「例えば、およそ」を表すほか、この箇所のように「量の不特定性」を表す用法もある。なお、tychoi < tynchānō「出会う、達する、たまたま〜となる」。2 aor. 希求法、3 人称、単数。また、phōnē は、「音、声、叫び声」のほかに、「(音声) 言語、言葉」を意味する。ここは後者。

⁵³⁰ 「音声のないもの」と訳したのは、áphōnon。「音韻のないもの」(田川訳)。ただし、邦訳の大多数が、「意味のないもの」(協会訳、バルバロ訳、前田訳、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳「意味のない言葉」(新改訳、柳

しにその言語の意味が分からなければ⁵³¹、わたしは話している人にとって野蛮人⁵³²になるし、話している人もまた、わたしの中で野蛮人(になります)。12 これと同じように、あなたがたも、霊に関して熱心な人たちなのですから⁵³³、教会の建設に役立つように熱心に求め⁵³⁴、溢れるほどに(霊の賜物を)いただきなさい⁵³⁵。

13 だから、異言によって語る人は、自分が(それを)解釈できるように⁵³⁶ 祈りなさい。14 [なぜなら] もし、わたしが異言によって祈るならば、わたしの霊は祈っても、わたしの理性は実を結ばない [から]⁵³⁷ です。15 それでは、どうすればよいのでしょうか。わたしは霊によって祈り、同時に理性によっても祈りましょう。霊によって讃美を歌い、同時に理性によっても讃美を歌いましょう⁵³⁸。16 でなければ、たとえ、あな

生訳)などと訳してきた。他に「ことばでないもの」(本田訳)。田川、前掲書、359～360頁、参照。

⁵³¹ 「わたしにその言葉の意味が分からなければ」と訳したのは、*eàn…mē eidō tēn dynamin tēs phōnōn*。dynamis は言葉、言語に関して使われる場合は、「意味」を表す。それは、言葉あるいは言語の固有の「力」が音声によって種々の対象を指示すること、つまり「意味する」ことに他ならないことに基づく。

⁵³² 「野蛮人」と訳したのは、*bárbaros*。よく知られているとおり、この言葉は、ギリシア人にとって他民族の言語が何を言っているか訳が分からないために、それを「バルバル、バルバル」と言い表した擬声語。

⁵³³ 「霊に関して熱心な人たちなのですから」と訳したのは、*epei zēlōtai este pneumātōn*。本来ならば、*pneumātōn* は *pneumatikōn* 「霊の賜物」となるべきところ。複数になっているので、聖霊ではなく、多様な霊の賜物であろう。パウロは、こういうところに厳密な書き手ではない。

⁵³⁴ 「教会の建設に役立つように熱心に求め」と訳したのは、*prōs tēn oikodomēn tēs ekklesiās zēteite*。ekklesiā は、言うまでもなく、建物ではなく、信仰を同じくする者の集団を指す。

⁵³⁵ 「溢れるほどに(霊の賜物を)いただきなさい」と訳したのは、*hína perisseúēte*。prōs の前にある *pneumātōn* (注 524、参照) が生きている。なお、ここでは、接続詞 *hína* を、結果を表すものと解した。

⁵³⁶ 「自分が(それを)解釈できるように」と訳したのは、*hína diermēneúēi*。

⁵³⁷ [なぜなら] …… [から] は、原文の [gar] を訳したもの。

⁵³⁸ この節で、「讃美を歌い」、「讃美を歌いましょう」と訳したのは、*psalō < psállō* 「竖琴(の弦)を爪弾く」、「讃美の歌を歌う、讃歌を歌う」。未来、1人称、単数。psalmós 「讃歌、頌歌、詩編」は、この動詞に由来。なお、7

たが霊で褒め讃えても、素人の場を占める人⁵³⁹は、あなたの感謝に合わせて⁵⁴⁰ どうして「アーメン」と言えるのでしょうか。あなたが何を言っているのかその人には分からないのですから。17 あなたは、実際、立派に感謝を表します⁵⁴¹ が、だからといって、他の人が建てられるわけではないのです。18 わたしは神に感謝を表しますし、あなたがたの誰にも増して異言によって語ります⁵⁴²。19 しかし、教会の中でわたしが望むのは、他の人々をも教えるために⁵⁴³、五つの言葉をわたしの理性によって

節で「豎琴」と訳したのは kithára であるが、psaltērion という弦楽器も知られている（ラテン語では psalterium、英語でも psaltery）。

⁵³⁹ 「たとえ、あなたが霊で褒め讃えても」と訳したのは、eân eulogēis [en] pneūmati. 写本によって、en が入っているものがあるが、en が入る方が有力。翻訳にはほとんど影響がない。ここで「褒め讃える」と訳した eulogēō は、他の箇所（ローマ 12：14、1 コリント 4：15、10：16、ガラテヤ 3：9）では文脈上「祝福する」と訳した単語。「素人の場を占める人」と訳したのは、ho anaplērōn tōn tōpon toū idiōtou. で、ほとんど直訳（「素人の位置を満たす人、素人の席を満たす人」）に近い。idiōtēs は、「素人、無学な者、普通の人、初心者、一般人」。ただし、パウロは、ここで、信徒とそれ以外の人を分けるためにこの単語を用いているわけではなく、むしろ、普通の言葉による讃美しか分からない信徒に配慮せよ、と注意しているのである。

⁵⁴⁰ 「あなたの感謝に合わせて」と訳したのは、epi tēi sēi eucharistīā. eucharistīa は「感謝、感謝の祈り」。ここでは、霊によって唱える「感謝」、つまり、異言によって唱える感謝の祈り。解釈（通訳）されなければ、一般の人には分からない。

⁵⁴¹ 「あなたは、実際、立派に感謝を表します」と訳したのは、sy mēn gār kalōs eucharisteis. eucharistēō は、「感謝する、感謝の祈りを唱える」。ここは、文脈から、「異言によって感謝を表す」の意味。「が、だからといって」は、all' の訳。

⁵⁴² 「わたしは神に感謝を表しますし、あなたがたの誰にも増して異言によって語ります」と訳したのは、Eucharistō tōi theōi, pāntōn hymōn mōllon glōssais lalō. 13 節から続く文脈から判断し、このように訳した。邦訳は青野訳を除いて、恰も Eucharistō tōi theōi hōti pāntōn hymōn mōllon glōssais lalō であるかのように訳しているが、僅かの写本を除いて原文に hōti はない。従って、むしろ、「わたしは、感謝を表すとき、あなたがたの誰にも増して異言によって語る」というニュアンスか。異言による感謝でも誰にも負けない！というパウロの自負がにじみ出ている発言。

⁵⁴³ 「他の人々をも教えるために」と訳したのは、hína kai állois katēchēsō という句。ただし、訳出に際して、原文の語順を若干入れ替えざるを得なかつ

語ることであって、一万の言葉を異言によって⁵⁴⁴（語ることではありません）。

20 兄弟のみなさん、判断力に関しては子どもになってはいけません。むしろ、悪事に関しては幼児となり、判断力に関しては大人⁵⁴⁵ になりなさい。21 律法に、次のように書かれています。

「『異国の言葉によって、また異国の人々の唇によって⁵⁴⁶、わたしはこの民に語るだろう。

しかし、そのようにしても、彼らはわたしに耳を傾けないだろう』と主は言われる。」⁵⁴⁷

22 このように、異言が徴となる⁵⁴⁸ のは、信じる者のためではなく、信じていない者のためです。他方、預言は信じていない者のためではなく、

た。わたしが目指したのは、原文で末尾にcoming *ē myrífous lógous en glōssē* 「一万の言葉を異言によって」という句を、訳文でも末尾に置くことであつた。そうするために、原文の *thélō* 「わたしは望む」を「わたしが望むのは」とした。

⁵⁴⁴ 「異言によって」と訳したのは、*en glōssē*。

⁵⁴⁵ 「大人」と訳したのは、*téleioi*。「完全な者」（田川訳）と訳すことももちろん可能。ただし、*nēpiazete* 「幼児となりなさい」と対比されているので、「大人」としておいた。なお、「子ども」は、*paidia*。ただし、*téleios*, *téleioi* は、マタイ 5:48 で「完全な」という意味で使われている。*ésesthe oũn hymeĩs téleioi hōs ho patēr hymōn ho ouránios téleiōs estin*。「だから、あなたがたも完全な者となりなさい。あなたがたの天の父が完全であられるように。」

⁵⁴⁶ 「異国の言葉によって、また異国の人々の唇によって」と訳したのは、*en heteroglōssois kai en cheĩlesin hetērōn*。パウロは、明らかに「異国の言葉」つまり「異国の舌」で「異言」が連想されることを期待している。音節化されてはいても意味不明の言葉は、それを聞く者にとっては「異言」と異ならない。

⁵⁴⁷ イザヤ 28:11~12, 参照。ただし、マソラとも LXX 訳とも異なる。対応する LXX 訳を示すと、次のとおり。*diā phaulismōn cheilēōn diā glōssēs hetērās, hōti lalēsousin tōi laōi toutōi…… kai ouk ēthēlēsan akoúein*。「（主は）邪惡な唇を使って、異国の言葉を使って、この民に語られる。……しかし、彼らは聞こうとしなかった」（11 節全体と 12 節の最後）。

⁵⁴⁸ 「異言が徴となる」と訳したのは、*hai glōssai eis sēmeiōn eisino*。これも、文章の順番を優先して、若干意識してある。

信じる者のためです。23 だから、もし、教会全体が同じ場所に集まって⁵⁴⁹、皆が異言によって語っているところへ、素人や信じていない者が入って来たら、あなたたちは気が狂っているとその人たちは言わないでしょうか。24 しかし、もし、皆が預言しているところへ、信じていない者や素人が誰か入って来たら、皆から非を指摘され、皆から裁かれて、25 その人の心の隠されたことが明らかになり、このようにして、その人は、ひれ伏して神を拝み、「本当に、神はあなたがたのうちにおられます」⁵⁵⁰と告白することになるのです。

〈すべては秩序のうちに〉

26 兄弟のみなさん、それでは、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まるときには、各自が讃美の歌を担い、教えを担い、啓示を担い、異言を担い、解釈を担っていますが、すべては建設のために⁵⁵¹なされるべきです。27 もし、誰かが異言によって語る場合には、二人かせいぜい三人が順番にして、しかも一人は解釈しなさい。28 しかし、もし、解釈する者がいなければ、教会では沈黙し、自分自身と神に向かって語りなさい。29 また、預言する者は、二人か三人が語り、他の人たちは吟味識別しなさい⁵⁵²。30 また、もし、座っている他の人に啓示が与えられたならば、最初の人⁵⁵³は沈黙しなさい。31 なぜなら、あなたがたは一人ひと

⁵⁴⁹ 「教会全体が同じ場所に集まって」と訳したのは、synélthēi hē ekklēsiā hólē epì tò autò. ちなみに、11：20 に、Synerchoménōn…hymōn epì tò autò 「あなたがたが同じ場所に集まっても」という分詞構文が出ている。

⁵⁵⁰ 引用の原文は、(hóti)óntōs ho theōs en hymīn estin. LXX 訳イザヤ 45：14 に、hóti en soi ho theós estin 「あなたのうちに神はおられます」という文章が、また、LXX 訳ゼカリヤ 8：23 に、hóti ho theōs meth' hymōn estin 「神はあなたがたとともにおられる」という文章が、それぞれある。

⁵⁵¹ 「建設のために」と訳したのは、prōs oikodomēn. もちろん、tēs ekklēsiās もしくは hymōn を補うと分かりやすい。

⁵⁵² 「吟味識別しなさい」と訳したのは、diakrinētōsan. 「検討しなさい」(新共同訳)、「吟味すべきである」(協会訳)、「吟味しなさい」(フランシスコ会聖書研究所訳、新改訳、青野訳)、「吟味なさい」(前田訳)、「判断せよ」(バルバロ訳)、「判断すべきである」(田川訳)、「よく検討し、正しい判断を下すべきである」(柳生訳)、「解釈してください」(本田訳)。

⁵⁵³ 「最初の人」と訳したのは、ho prōtos. 「先に預言をし始めた人」(フラン

り皆、預言することができるからであり、それは、皆が学び、皆が励ましを受ける⁵⁵⁴ ためなのです。32 また、預言する者たちの霊は、預言する者たちに服従しますが、33 神は、混乱の⁵⁵⁵ 神ではなく、平和の神だからです。聖なる者たちのすべての教会でそうであるように⁵⁵⁶ 34 女たちは、教会では沈黙していなさい。実際、彼女たちには語ることが許されていないからで、むしろ、服従しなさい。これは、まさに律法も言っていることです⁵⁵⁷。35 もし、何かを学びたいと思うならば、家で自分の夫に尋ねなさい。なぜなら、女たちにとって、教会で語ることは恥ずべきことだからです。36 それとも、あなたがたから、神の言葉は出て来たのですか、あるいは、あなたがたの許にだけ届いたのですか⁵⁵⁸。

37 もし、誰か、自分は預言する者だとか、あるいは、霊の人だとか思う者があるならば、わたしが今あなたがたに書いていることを主の掟と認めなさい⁵⁵⁹。38 しかし、もし、(これを)知らない者があれば、その者

シスコ会聖書研究所訳、「先に語りだしていた者」(新共同訳)は意識。文脈から判断して、「最初に預言を語り始めた人」を指すのは明らか。もちろん、二番目、三番目に預言を語る人が沈黙しなくてよいということではない。異言よりも預言、預言よりも啓示が優位にある。

⁵⁵⁴ 「励ましを受ける」と訳したのは、*parakalōntai*。

⁵⁵⁵ 「混乱の」と訳したのは、*akatastasfās*。 *akatastasfā* 「騒乱、騒動、混乱、無秩序」。

⁵⁵⁶ ネストレ 27 版のテキストは、33 節の途中で段落を分けている。ただし、田川が指摘するとおり、33 節の途中で段落分けする根拠はない。いずれにせよ、写本の段階では、節番号すらなかったのであるから、文脈上・意味上のつながりで判断するしかない。私訳では、ここでの段落分けはせず、続けて訳すことにした。田川、前掲書、364～365 頁、参照。

⁵⁵⁷ 「これは、まさに律法も言っていることです」と訳したのは、*kathōs kai ho nōmos légei*。原文の順番を生かすために、こう訳した。ここで律法と言われているのは、創世記 3:16 に記された神の宣言、*autós sou kyrieúsei* 「彼はお前を支配する。」であろう。なお、33～34 節に関係する問題について、詳細は、田川、前掲書、365～369 頁、参照。

⁵⁵⁸ 「出て来た」と訳したのは、*exēlthen* < *exérchomai* 「出て行く、出て来る」。「届いた」と訳したのは、*katēntēsen* < *katantāō* 「(下の方へ) やって来る、到来する、到着する、届く、訪れる、臨む」。いずれも、*aor*.形。

⁵⁵⁹ 「わたしが今あなたがたに書いていることを主の掟と認めなさい」と訳したのは、*epiginōskētō hā grāphō hymīn hōti kyriou estin entolē*。なお、

も知られることはありません⁵⁶⁰。39 だから、[わたしの]兄弟たちよ、預言することを熱心に求めなさい⁵⁶¹、また、異言によって語ることを妨げてはいけません。40 しかし、すべてが、品位を持って、また、秩序正しくなされなければなりません⁵⁶²。

15

〈キリストの復活〉

1 さて、兄弟のみなさん、わたしはあなたがたに福音を知らせます。これは、かつてわたしがあなたがたに福音として告げ知らせ、あなたがたがすでに受け取り、また、その中にしっかりと立っている⁵⁶³、その福音です。2 また、それをとおして、あなたがたが救われることになる福音です。どんな言葉でわたしがあなたがたに福音を告げ知らせたかを、あなたがたが堅持していれば⁵⁶⁴ ですが。しかし、あなたがたが無駄に信

7:10 の parangéllō, ouk egō allā ho kyrios, 「(わたしは) 命じます。(命じるのは) わたしではなく、主(ご自身)ですが、」という句を参照。

⁵⁶⁰ 「しかし、もし、(これを)知らない者があれば、その者も知られることがあります」と訳したのは、ei dé tis agnoeī, agnoētai. 「知られることがあります」は、いわゆる「神的受動」で、「神によって知られることがあります」の意味。「無視する」、「無視される」の対比で訳すのは、協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳、田川訳。「認める」、「認められない」は、前田訳、新改訳、新共同訳、ちなみに、本田訳は「それを認めない者は、神もその人を認めはしません」。もしかすると、ここを読む人は、マタイ 10:33、ルカ 12:9 を思い浮かべるかもしれない。しかし、内容的には近いものの、いずれも使われている動詞が違う(マタイ: arnēsētai me·ar·nēsomai kagō autōn, ルカ: arnēsāmenós me·aparnēthēsetai)。

⁵⁶¹ 1 節、参照。

⁵⁶² 「しかし、すべてが、品位を持って、また、秩序正しくなされなければなりません」と訳したのは、pánta dē euschēmónōs kai katà táxin ginésthō. 「品位」に関連して、7:35, 12:24, ローマ 13:13, 1 テサロニケ 4:12, 参照。

⁵⁶³ ローマ 11:20, 参照。

⁵⁶⁴ 「あなたがたが堅持していれば」と訳したのは、ei katéchete. 11:2, 参照。ニュアンスとしては「忘れずにしっかりと心にとどめている」。

じたならば、別です⁵⁶⁵。3 実際、わたしがあなたがたに最も重要なこととして伝えたのは、わたしも受け取ったものです。すなわち、キリストが聖書に従ってわたしたちの罪のために死んだこと⁵⁶⁶、また、葬られたこと、そして、聖書に従って三日目に立ち上がらせられたこと⁵⁶⁷、5 また、ケファに現れ、次いで十二人に（現れたこと）です。6 次に、五百人以上の兄弟たちに一度に現れたましたが、その中の大部分の人々は今なお生き残っています、何人かは眠りにつきましたが。7 次に、ヤコブに現れ、次いですべての使徒たちに、8 さらに、すべての人々の最後に、まるで流産によって生まれたようなわたしにまで現れてくださった⁵⁶⁸のです。9 実際、わたしは使徒たちの中で最も小さな者、使徒と呼ばれる十分な資格がない者です。神の教会を迫害した⁵⁶⁹のですから。10 しかし、神の恵みのお蔭で、わたしは現在のわたしなのです。そして、わたしに対する神の恵み⁵⁷⁰が空しくなることはなく、むしろ、彼らの誰にも増してわたしは努力して働きました⁵⁷¹。しや、そうしたのは、わたしで

⁵⁶⁵ 「あなたがたが無駄に信じたならば、別です」と訳したのは、ektōs ei mē eikē, episteúsate。

⁵⁶⁶ イザヤ 53:5, 参照。

⁵⁶⁷ ホセア 6:2, ヨナ 2:1, さらに、マタイ 16:21, 参照。

⁵⁶⁸ 「まるで流産によって生まれたようなわたしにまで現れてくださった」と訳したのは、hōsperei tōi ektrōmati ōphthē kāmoí. éktrōma < ektitrōskō 「流産する, 死産する」。これについては、P. von der Osten-Sacken による当該項目（『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 I』教文館, 1993 年, 483 頁）, 参照。直訳は「まるで流産によるようなわたしにも現れた」。ちなみに、tōi ektrōmati の部分の訳は、従来「月足らず」（新共同訳）の系統（協会訳, バルバロ訳, フランシスコ会聖書研究所訳, 前田訳, 新改訳）が優勢であり、他に「生まれ損ない」（柳生訳）, 「生まれそこない」（田川訳）, 「未熟児」（青野訳）, 「未熟者」（本田訳）がある。

⁵⁶⁹ ガラテヤ 1:13, 使徒言行録 8:1, 3, 参照。

⁵⁷⁰ 「わたしに対する神の恵み」と訳したのは、hē chāris autoū hē eis emē。 「わたしに対する神の恵み」（フランシスコ会聖書研究所訳）, 「私に対するこの神の恵み」（新改訳）, 「わたしに賜った神の恵み」（協会訳）, 「わたしに与えられた神の恵み」（新共同訳）, 「私に注がれた神の恵み」（田川訳）, 「わたしへの神の恵み」（青野訳）, 「私が受けた恩寵」（バルバロ訳）, 「神のわたしへの恩恵」（前田訳）など。

⁵⁷¹ 2 コリント 11:5, 23, 参照。

はなく、むしろ、わたしとともにある神の恵みです。11 だから、わたしにしても彼らにしても、わたしたちはこのように宣教しています⁵⁷² し、また、このようにあなたがたは信じたのです。

〈死者の復活〉

12 ところで、もし、キリストが死者たちの中から立ち上がらせられたと宣教されているのであれば、どうして、あなたがたの間で誰かが、死者の復活はないなどと言う⁵⁷³ のでしょうか。13 しかし、もし、死者の復活がなければ、キリストも立ち上がらせられはしなかったのです。14 また、もし、キリストが立ち上がらせられなかったのであれば、わたしたちの宣教は空しいもの、あなたがたの信仰も空しいものです⁵⁷⁴。15 そのうえ⁵⁷⁵、わたしたちは、神の偽証人となってしまいます。なぜなら、わたしたちは、神に反して、実際は（神が）立ち上がらせなかったキリストを（神が）立ち上がらせたと、証言したわけですから。もし、本当に、死者が立ち上がらせられることがないとすれば、ですが。16 実際、もし、死者が立ち上がらせられることがなければ、キリストも立ち上がらせられはしなかったのです。17 しかし、もし、キリストが立ち上がらせられなかったのであれば、あなたがたの信仰は空しく⁵⁷⁶、今でもあなたがたは自分たちの罪の中にあることになります。18 それならば、キリストにあって眠りについた人々も既に滅びた⁵⁷⁷ ことになります。19 もし、

⁵⁷² 3：5～6, 10, 参照。

⁵⁷³ マタイ 22：23 「復活はないと言っているサドカイ派の人々」、参照。

⁵⁷⁴ 「わたしたちの宣教は空しいもの、あなたがたの信仰も空しいものです」と訳したのは、*kenōn ára [kaì] tō kērygma hēmōn, kenē kai hē pístis hymōn*。なお、10 節に、*hē chāris autoū hē eis emē oū kenē egenēthē* 「神の恵みが空しくなることはなく」という表現がある。

⁵⁷⁵ 「そのうえ」と訳したのは、*de*。

⁵⁷⁶ 「空しく」と訳したのは、*mataiā*。3：20 に、LXX 訳詩編 93：11 の引用の形で、(*toūs dialogismoūs tōn sophōn*) *hōti eisīn mātaiōi* 「知者たちの考えが空しいことを」という句が出ている。14 節で、パウロは *kenōn, kenē* 「空しい」を使っているが、おそらく、意味の違いを意識してはいない。

⁵⁷⁷ 「既に滅びた」と訳したのは、*apōlonto < apōllymi* 「滅ぼす、絶やす、破壊する、殺す」。中動相で、「滅びる、消滅する、死ぬ」。ここは、2 aor., 中動

わたしたちが、この世の命の中で⁵⁷⁸ キリストに希望をかけたただけだとすれば、どんな人間よりもわたしたちは惨めな存在です⁵⁷⁹。

20 しかし、今や、キリストは、死者たちの中から、眠りについた者たちの初穂として立ち上がらせられたのです。21 実際、一人の人間をとおして死が生じた⁵⁸⁰ のですから、やはり一人の人間をとおして死者たちの復活⁵⁸¹ も生じるのです。22 すなわち、アダムとの関係で⁵⁸² すべての人が死ぬのと同じように、キリストとの関係ですべての人が命を与えられる⁵⁸³ ことになるのです。23 しかし、各自、自分の順序で⁵⁸⁴、すなわち、初穂がキリスト、次に、キリストに属する人々がキリストの再臨のときに⁵⁸⁵、24 次いで、終り（がやって来ます）。そのとき、（キリストは）、支配権を神に、すなわち御父に引き渡し、同時に⁵⁸⁶、あらゆる権力、あらゆる権威と力を⁵⁸⁷ 無力にするのです⁵⁸⁸。25 なぜなら、「（神が）

相、3人称、複数。

⁵⁷⁸ 「この世の命の中で」と訳したのは、en tē_i zōē_i taútē_i. taútē_i のニュアンスを出すには、「今生の命で」、「現世で」、「この世の生で」、「地上の人生で」などと意識するのが順当。「この人生において」（フランシスコ会聖書研究所訳）は上手い意識。

⁵⁷⁹ 「どんな人間よりもわたしたちは惨めな存在です」と訳したのは、eleeinōteroi pāntōn anthrō-pōn esmén. 直訳は、「すべての人間たちよりもわたしたちは一層惨めです」、「どんな人間たちよりもわたしたちは惨めです」。

⁵⁸⁰ 創世記 3：17～19、ローマ 5：12、参照。

⁵⁸¹ 「死者たちの復活」と訳したのは、anástasis nekrōn. なお、原文には、「生じた」、「生じる」に相当する動詞は当然ない。日本語では、「生じる」、「到来する」、「もたらされる」などを補わないと文章の体をなさない。

⁵⁸² 「アダムとの関係で」と訳したのは、en tō_i Adām. 次に出る「キリストとの関係で」も、やはり、en tō_i Christōi. この en を、フランシスコ会聖書研究所訳は「に連なって」と、新共同訳は「によって」と、訳す。

⁵⁸³ 「命を与えられることになる」と訳したのは、zō_i opoiēthēsontai < zō_i opoiēō 「生かす、命を与える」。受動相、未来、3人称、複数。

⁵⁸⁴ 1 テサロニケ 15～17、参照。

⁵⁸⁵ 1 テサロニケ 4：15～17、参照。

⁵⁸⁶ この「同時に」は、同じ節の前半 télos 「終わり」の直後に出る hótan 「そのとき」と同じ単語を訳したもの。

⁵⁸⁷ 「あらゆる権力、あらゆる権威と力を」と訳したのは、pāsan archēn kai

すべての敵をその足の下に置くまでは」⁵⁸⁹、キリストが支配することになっている⁵⁹⁰からです。26 最後の敵として、死が無効にされます⁵⁹¹。27 なぜなら、「(神は) すべてのものをその足の下に従わせた」⁵⁹²からです。しかし、すべてのものが従わせられたと言うとき、明らかなのは⁵⁹³、すべてのものを彼に従わせた方を除くことです。28 そして、すべてのものが彼に従うとき、御子ご自身[も]、すべてのものを彼に従わせた方に従うでしょう。それは、神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

29 もしそうでなければ、何をしていることになりますか、死者たちのために洗礼を受ける人々は。もし、そもそも、死者たちが立ち上がらせ

pāsan exousiān kai dynamin. これらは、いずれもこの世の権力や権威ではなく霊的な宇宙的諸力を指している。ガラテヤ 4:3 には, tā stoicheiā toū kōsmou「世界の諸要素, 宇宙の諸元素」として類似の異教的崇拝対象が言及されている。ちなみに、われわれの箇所に出ている権力、権威、力は、後に、権天使、能天使、力天使として、他の諸々の天的存在とともに天上の位階にその場を与えられ、秩序立てられて行くことになる。紀元後 6 世紀初めの『天上位階論』(ディオニュシオス偽書)を参照。

⁵⁸⁸ 「無力にするのです」と訳したのは, katargēsēi. 同じ動詞は, 1:28, 2:6, 6:13 (以上, 「無力にする」), 13:8 (2回), 10 (以上, 受動相で「廃れる」), 11 (現在完了で「止めにした」), 15:26 に出る。なお, この他, ローマに 6回, 2 コリントに 4回, ガラテヤに 3回。

⁵⁸⁹ LXX 訳詩編 109:1 (マソラ同 110:1), 参照。LXX 訳は, hēōs an thō toūs echthroūs sou hypopōdion tōn podōn sou 「わたしがあなたの敵をあなたの足の足台とするまで」。なお, パウロによる引用は, thēi (pāntas) toūs echthroūs hypō toūs pōdas autoū.

⁵⁹⁰ 「キリストが支配することになっている」と訳したのは, deī…autōn basileuein. autōn は, 23 節の Christós を受け, deī に支配されているため accusativus cum infinitivo となっている。

⁵⁹¹ 「無力にされます」と訳したのは, katargeitai. 「無力なものにされます」(本田訳)。「滅ぼされます」(フランシスコ会聖書研究所訳, 前田訳, 新改訳, 新共同訳) ももちろん可能。「たおされる」(バルバロ訳), 「無効にされる」(田川訳)。他に「壊滅させられる」(青野訳) など。

⁵⁹² LXX 訳詩編 8:7, 参照。LXX 訳は, pānta hypétaxas hypokátō tōn podōn autoū「すべてのものを従わせて彼の足の下に置いた」。なお, パウロによる引用は, pānta (gār) hypétaxen hypō toūs pōdas autoū.

⁵⁹³ 「明らかなのは, …ことです」と訳したのは, dēlon hōti. 原文で dēlon が先に来ている文章の流れを活かして訳した。

られないのであれば、なぜ、彼らのためにあえて洗礼まで人々は受けるのでしょうか。⁵⁹⁴ 30 なぜ、わたしたちもまた、絶えず危険を冒すのでしょうか。31 日々、わたしは死んでいるのです⁵⁹⁵。あなたがたに対する誇りにかけて（誓って言います）⁵⁹⁶、[兄弟のみなさん]、わたしたちの主キリスト・イエスにあってわたしたちが持っているその誇りにかけて。32 もし、人間のことでわたしがエフェソスで野獣と闘った⁵⁹⁷とすれば、何がわたしの得になるでしょう。もし、死者たちが立ち上がらせられないのであれば、「食べよう、飲もう。明日は死ぬのだから」⁵⁹⁸（となるはずです）。33 惑わされてはいけません⁵⁹⁹。

「悪しき付き合いは、良い習慣を滅ぼす」⁶⁰⁰のです。

34 正しく酔いから覚めて⁶⁰¹、罪を犯さずにいなさい。なぜなら、ある者たちは神についての無知を持っているからです⁶⁰²。あなたがたに敬意を

⁵⁹⁴ 「あえて洗礼まで人々は受けるのでしょう」と訳したのは、kai baptizontai。「あえて…まで」に kai のニュアンスを込めた。

⁵⁹⁵ ローマ 8：36 における LXX 訳詩編 43：23 の引用 hēneken soû thanatoumétha hólēn tēn hēmērān 「あなたのために、わたしたちは一日中死にさらされており」を参照。1 コリント 4：9、2 コリント 4：10～11 も参照。

⁵⁹⁶ 「あなたがたに対する誇りにかけて（誓って言います）」と訳したのは、nē tēn hymetērān kaūchēsīn。断言や誓いの際に使う不変化詞 nē は、いわゆる hapaxlegomenon。

⁵⁹⁷ 具体的な体験は詳らかでないが、2 コリント 1：8～9、参照。

⁵⁹⁸ LXX 訳イザヤ 22：13、参照。この箇所のパウロの記憶は LXX 訳原文と一致している。

⁵⁹⁹ 6：9 に同じ句が出ていた。

⁶⁰⁰ 原文は、phtheirousīn ēthē chrēstā homilīai kakaí。メナンドロスの失われた喜劇『タイス』からの引用とされる。「習慣」と訳したのは、いわゆる ēthos エートスである。homiliā は、「交際、付き合い、交わり」。この文章は、パウロの真筆では聖書以外からの唯一の引用。

⁶⁰¹ 「正しく酔いから覚めて」と訳したのは、eknēpsate dikaíōs. eknēphō < ek + nēphō 「酔っていない、酒を飲まない、しらふである」。1 aor. 命令、2 人称、複数。なお、前置詞に由来する接頭辞 ek は、強意。nēphō の比喩的使用については、1 テサロニケ 5：6、8、参照（前者は、grēgorōmen kai nēphōmen 「目覚めたまま、酔わずにいきましょう」）。Dikaíōs は、「しっかりと」とも訳しうるが、そのまま「正しく」と直訳した。

払って、わたしは言っているのです⁶⁰³。

〈復活のからだ〉

35 それでも、ある者は言うでしょう。「どんな仕方で、死者たちは立ち上がらせられるのか」、また、「どんなからだで彼らはやって来るのか」、と。36 無分別な人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を与えられるはしない⁶⁰⁴ のです。37 また、あなたが蒔くものは、成長する前のからだではなく⁶⁰⁵、むしろ、裸の種粒を蒔くのです。麦の種であれ、他のどんなものの種であれ(そうです)。38 そこで、神はその種粒に、ご自分が望まれたとおりに⁶⁰⁶ からだを与えるのですが、一粒一粒の種にそれぞれ固

⁶⁰² この部分は、あえて直訳した。通常は、「ある者たちは神について知識をもっていない」のように訳される。ただ、ここに、パウロが皮肉を込めているとすると、むしろ、ある者たちが持っている主張しているのは、「神についての知識」などではなく、「神についての無知」に過ぎないのだ、というニュアンスであろうから、一応、私訳では、agnōsiān theoū を直訳することを優先した。なお、gar 「なぜなら」は、「わたしがこう言うのは」という含み。
⁶⁰³ 6：5、参照。むしろ、「あなたがたのためを思って、わたしは言っているのです」くらいが適訳か。田川訳「これを言うのは、ああなたがたのためである。」田川、274～275 頁、参照。

⁶⁰⁴ ヨハネ 12：24 のよく知られた文章、eān mē ho kókkos toū sítou pesōn eis tēn gēn apothānēi, autōs mōnos ménei' eān dē apothānēi, polyn karpōn pherei. 「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」を想起させる。

⁶⁰⁵ 「あなたが蒔くものは、成長する前のからだではなく」と訳したのは、hō speíreis, oū tō sōma tō genēsómenon. tō sōma tō genēsómenon は、若干訳しにくい語。「成るであろうからだ」(青野訳)がまさに直訳。「やがて成るべきからだ」(協会訳)、「やがて成るべき体」(田川訳)、「出来るであろう体」(前田訳)、「後にできるからだ」(新改訳)、「後でできる体」(新共同訳)、「のちに生まれる体」(バルバロ訳)、「後で成熟する『体』」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「やがて現れる姿」(本田訳)、「結実した実」(柳生訳)。パウロが言わんとするのは、われわれが蒔くのは、これから成長してゆく極小のからだではなく、裸の種粒に過ぎないということである。であればというわけで、「成長する前のからだ」と思い切って意識したのが私訳。

⁶⁰⁶ 「ご自分が望まれたとおりに」と訳したのは、kathōs ethélēsen. 同じ句が、12：18 にも出る。

有のからだを⁶⁰⁷(与えるのです)。 39 すべての肉が同じ肉というわけではなく、むしろ、人間の肉、家畜の肉、鳥の肉、魚の肉⁶⁰⁸はそれぞれ違います。40 また、天上のからだがあり、地上のからだがありますが、しかし、天上のからだの輝きと地上のからだのそれは異なります。41 太陽の輝きが違い、月の輝きも違い、星の輝きも違います。実際、ある星と他の星とでは、輝きが違います⁶⁰⁹。

42 死者たちの復活もこのようなものです⁶¹⁰。朽ちるものとして蒔かれ、朽ちないものとして立ち上がらせられ⁶¹¹、43 恥ずべきものとして蒔かれ、輝かしいものとして立ち上がらせられ⁶¹²、弱いものとして蒔かれ、力あるものとして立ち上がらせられる⁶¹³のです。44 蒔かれるのは生き物としてのからだで、立ち上がらせられるのは霊的なからだです⁶¹⁴。もし、生き物としてのからだがあるのなら、霊的な（からだ）もあるの

⁶⁰⁷ 「一粒一粒の種にそれぞれ固有のからだを」と訳したのは、hekástō_i tōn spermātōn ídion sōma。

⁶⁰⁸ 「家畜の肉」、「鳥の肉」は、それぞれ、sārx ktēnōn, sārx ptēnōn で、語呂合わせになっている。なお、ptēnōs「鳥」<pétomai「飛ぶ」。レビ記 11:13~19 に列挙されている汚れた「鳥類」の最後に「こうもり」が出ているのを思い出す。

⁶⁰⁹ 「実際、ある星と他の星とでは、輝きが違います」と訳したのは、astēr gār astēros diaphērei en dōxē_i。もちろん、「輝きが違います」は、直訳では「輝きにおいて違います」。

⁶¹⁰ 「死者たちの復活もこのようなものです」と訳したのは、Hoútōs kai hē anástasis tōn nekrōn。この houtōs は、論理的には、35 節の pōs「どんな仕方」で、死者たちは立ち上がらせられるのか」という疑問に対応する「このように」である。

⁶¹¹ 「朽ちるものとして蒔かれ、朽ちないものとして立ち上がらせられ」と訳したのは、speíretai en phthorā_i, egeíretai en aphtharsíā_i。直訳すると「朽ちるものにおいて蒔かれ、不朽性のうちに立ち上がらせられる」。

⁶¹² 「恥ずべきものとして蒔かれ、輝かしいものとして立ち上がらせられ」と訳したのは、speíretai en atimíā_i, egeíretai en dōxē_i。

⁶¹³ 「弱いものとして蒔かれ、力あるものとして立ち上がらせられる」と訳したのは、speíretai en asthenefā_i, egeíretai en dynámei。

⁶¹⁴ 「蒔かれるのは生き物としてのからだで、立ち上がらせられるのは霊的なからだです」と訳したのは、speíretai sōma psychikón, egeíretai sōma pneumatikón。

です。45 それで、また、次のように書かれています。「最初の人アダムは、命ある生き物となった」⁶¹⁵ が、最後のアダムは命を与える⁶¹⁶ 霊となった、と⁶¹⁷。46 しかし、最初（にあったの）は、霊的な（からだ）ではなく、むしろ、生き物としての（からだ）であり、次に霊的な（からだが生じるのです）⁶¹⁸。47 最初の人土に由来し⁶¹⁹ 塵から造られた者、第二の人は天に由来する者です。48 塵から造られた者に当てはまることは、そのまま、塵から造られた者たちにも当てはまり、天に属する方に

⁶¹⁵ 「最初の人アダムは、命ある生き物となった」と訳したのは、hoútōs kai gégraptai' egéneto ho prōtos ánthrōpos Adām eis psychēn zōsan. LXX 訳創世記 2:7 からの引用だが、原文は、egéneto ho ánthrōpos eis psychēn zōsan。見て分かるように、パウロは ho ánthrōpos を ho prōtos ánthrōpos Adām に替えている。私訳では、psychikós「生き物としての」との意味上の関連を示すために psychē を「生き物」と訳した。両者の関連を訳語に反映させることに苦心する翻訳者泣かせの単語。ちなみに、psychikós の訳語を列記すれば、「肉の」（協会訳、前田訳）、「動物的な」（バルバロ訳）、「自然の命の」（フランシスコ会聖書研究所訳、新共同訳）、「自然的な」（青野訳）、「(自然的) 生命の」（田川訳）。「心情的な」（本田訳）は psychikós の意味領域のかなりの部分を捉えていない。柳生訳は、42～49 節の一まとまりの文脈の中でも「肉の」、「肉の・自然的」と訳語に揺れが見られる。

⁶¹⁶ 「命を与える」と訳したのは、zōopoioûn という中性分詞。

⁶¹⁷ 45 節の訳は、パウロが読ませようとしているとおりの続き具合を尊重している。われわれが読む校訂版のテキストでは、引用と見なされる文章がイタリックになっているが、もともと口述筆記された手紙にも、それを基に作られた手紙の写しにも、そのような違いは当然なかった。その点を考慮して読んでみると、後半の「最後のアダムは、命を与える霊となった」までを書かれたものとして読ませようとしているパウロの姿が透けて見えるような気がするのである。テキスト・クリティックはけっこう曲者である。

⁶¹⁸ この節の原文は、次のとおり。All' oû prōton tō pneumatikōn allā tō psychikōn, épeita tō pneumatikōn。自明の動詞 estín および名詞 sōma が省略されている。

⁶¹⁹ 「土に由来し」と訳したのは、ek gēs。「塵から造られた」は、形容詞 choikós<choūs「塵、塵芥、埃」。次に出る「天に由来する」は、ex ouranoû。なお、48、49 節の「塵から造られた」も choikós の、「天に属する」は epouránios の、それぞれ変換形。「地に由来し塵から造られた」の背景には、当然、LXX 訳創世記 2:7 の éplassen ho theōs tōn ánthrōpon choûn apō tēs gēs「神は、土から取った塵で人を形づくり」という記述がある。

当てはまることは、そのまま、天に属する者たちにも当てはまります⁶²⁰。49 そして、わたしたちは、塵から造られた者の似像⁶²¹を着ていた⁶²²ように、天に属する方の似像をも着ることになるでしょう。

50 さて、わたしはこう言います。兄弟のみなさん、肉と血は神の国を相続することができないし、朽ちるものは朽ちないものを⁶²³相続しないのです。51 見よ、一つの神秘をあなたがたに告げます。わたしたちは、全員が眠りにつくわけではありません。しかし、全員が変えられるのです⁶²⁴。52 たちまち、瞬く間に、最後のラッパとともに。すなわち、最後のラッパが鳴り響くと⁶²⁵、死者たちは立ち上がらせられて朽ちないものとされ、わたしたちは変えられるのです。53 なぜなら、必ずや、この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死すべきものが不死なるものを着ることになる⁶²⁶からです。54 また、この朽ちるべきものが朽ちないも

⁶²⁰ 「…に当てはまることは、そのまま、…にも当てはまり」と意識したのは、hoĩos… toioũtoi kai…という表現。原文の順番を生かしたかったので、意訳せざるを得なかった。

⁶²¹ 「似像」は、eikōn。「かたち（姿、像）、うつし（似像、似姿）、原像、肖像」。いわゆる、アイコン、アイコンの語源。LXX 訳創世記 5：3, kai egennēsen katà tēn idéan autoũ kai katà tēn eikōna autoũ kai epōnōmasen tō ōnoma autoũ Seth. 「(アダムは) 自分の姿に似せ自分のかたちに似せて子をもうけ、その子をセトと名づけた」、参照。idéa, eidéa は、目で見た「姿、外貌、様子」を指す。

⁶²² 「着ていた」と訳したのは、ephorésamen < phorēō 「(持続的に) 持ち運ぶ、(常態的に) 着る、身に着ける、まとう、帯びる」。1 aor. 1 人称、複数。節後半に、未来形が出る。

⁶²³ こども、42 節同様、前者が hē phthorā, 後者が hē aphtharsíā。

⁶²⁴ 「変えられるのです」と訳したのは、allagēsómetha < allássō 「変える、変化させる、代える、取り替える」。受動相、未来、1 人称、複数。

⁶²⁵ 「最後のラッパが鳴り響くと」と訳したのは、en tēi eschátēi sálpingi. 1 テサロニケ 4：16 に、en sálpingi theoũ 「神のラッパの(響く)中を、神のラッパが鳴り響くと」という句が出る。いずれにしても、本章の 23 節とこの 51～53 節の背景には、1 テサロニケ 4：15～17 節に描かれた間近に迫ったキリストの再臨へのパウロの強い期待感がある。なお、マタイ 24：31 には、kai aposteleĩ toũs angélois autoũ metà sálpingos megálēs, 「(人の子は) その御使いたちを大きなラッパの響きとともに遣わす」という文章が出てくる。

のを着、この死すべきものが不死なるものを着るとき、まさにそのとき、書かれている(次の)言葉が実現します。

「死は勝利に呑み込まれた⁶²⁷。

55 死よ、どこにあるのか、お前の勝利は。

死よ、どこにあるのか、お前の刺は。⁶²⁸」

56 ところで、死の刺は罪であり、また、罪の力は律法です⁶²⁹。57 しかし、神に感謝、神はわたしたちの主イエス・キリストをとおしてわたしたちに勝利を与えてくださるのです⁶³⁰。58 だから、わたしの愛する兄弟のみなさん、確固とした態度で、何事にも動かされず、いつも主の業に満ち溢れるようになりなさい⁶³¹。あなたがたは、主にある限り自分

⁶²⁶ 「必ずや…着、…着ることになる」と訳したのは、Deĩ…endynasthai…，…endynasthai…。また、「この朽ちるべきもの」は tò phthartòn toũto, 「朽ちないもの」は aphtharsĩā (直訳「不朽性」)。「この死すべきもの」は tò thnēton toũto, 「不死なるもの」は athanasĩā (直訳「不死性」)。2 コリント 5:4 の kai gār hoi ōntes en tōi skēnei stenázomen baroumenoi, eph' hōi ou thélomen ekdysasthai all'ependysasthai, hina katapothēi tò thnēton hypō tēs zōēs. 「実際、この幕屋の中であってわたしたちは重荷を負って呻いていますが、それを脱ぎたいからではなく、その上に着たいからです。そうすれば、死すべきものは命によって呑み込まれてしまうからです。」という文章も参照。

⁶²⁷ LXX 訳イザヤ 25:8, 参照。その冒頭に, katēpien ho thánatos ischysās 「力強い死は呑み込まれた」とあるが、おそらく単なる記憶に基づくものであろう。

⁶²⁸ 55 節は, LXX 訳ホセア 13:14, 参照。それは, poũ hē díkē sou, thánate; poũ tò kéntron sou, hāi dē; 「死よ、お前の罰はどこにあるのか。陰府よ、お前の刺はどこにあるのか。」という二つの疑問文を含む。パウロは、54 節末の eis nĩkos 「勝利に」に合わせて、前半の hē díkē 「罰」を tò nĩkos 「勝利」に替え、後半の hāidē 「陰府よ」を前半に合わせて thánate 「死よ」に替えたものと思われる。

⁶²⁹ ローマ 7:13, 参照。

⁶³⁰ この節の原文は, tōi dē theōi chāris tōi didónti hēmĩn tò nĩkos diā toũ kyrĩou hēmōn Iēsoũ Christou. 叙述の流れを生かすために, chāris の次に出る関係代名詞与格を敢えて「神は」と訳し, 分詞 didónti を定動詞のように訳した。

⁶³¹ 「確固とした態度で、何事にも動かされず、いつも主の業に満ち溢れるようになりなさい」と訳したのは, hedraĩoi gínesthe, ametakínētoi, peris

たちの労苦が決して無駄ではないことを知っているからです⁶³²。

16

〈聖なる人々のための募金〉

1 さて、聖なる人々のための募金⁶³³については、ちょうどわたしがガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたもまた行ないなさい。2 週の初めの日ごとに、あなたがたは各自、うまくいっていればその分を⁶³⁴、自分のもに蓄えておきなさい。わたしが着いてはじめて募金が

seúontes en tōi érgōi toū kyriou pántote. 定動詞は gínesthe < gínomai. 命令法, 2 人称, 複数. hedraíoi, ametakínētoi, perisseúontes はいずれも分詞, 複数, 主格. perisseúontes gínesthe の訳語については, 「励みなさい」(協会訳, 新改訳, 新共同訳), 「励んでください」(前田訳) は, 日本語として分かりやすいが, perisseúō の元来の意味「溢れる, 満ち溢れる, 豊かである」とはかなり隔たっている。「大いに精を出しなさい」(フランシスコ会聖書研究所訳) も同様。「増進する」(田川訳) も今一つ分かりにくい。「満ち溢れながら」(青野訳) は, gínesthe と関係させずに訳したものだが, 原意をそのまま生かしている。

⁶³² 「あなたがたは、主にある限り自分たちの労苦が決して無駄ではないことを知っているのですから」と訳したのは, eidōtes hōti ho kópos hymōn ouk éstin kenōs en kyriōi. 文法的には, 分詞 eidōtes を, 他の分詞同様 gínesthe に関係づけることも不可能ではないが, やはり, ここは通常に分詞の用法と採るのが順当なところ。「主にある限り」は, 原文は単に en kyriōi 「主にある, 主にあって」であるが, ニュアンスを重視すれば, こう訳するのがよいと判断した。なお, 1 テサロニケ 3:5, mē pōs …… eis kenōn génētai ho kópos hēmōn. 「わたしたちの労苦が無駄になってしまわないため」, さらに, LXX 訳イザヤ 65:23, hoi dē eklektōi mou ou kopiásousin eis kenōn …… 「わたしに選ばれた者たちは無駄に労することなく……」, 参照。

⁶³³ エルサレムの教会のための募金を指す。ガラテヤ 2:10, ローマ 15:25~28, 2 コリント 8~9 章, 使徒言行録 11:29, 参照。いわゆるエルサレム(使徒)会議の際に, ペトロが割礼ある者たちへの宣教を, パウロが無割礼の者たちへの宣教を担うという宣教における役割分担の確認と同時に, パウロに対してエルサレム教会の「貧しい者たち」のための募金の要請があった。ただし, エルサレムの共同体をディアスポラの共同体が支えることは, 当時, 既にユダヤ社会の慣例であった。

⁶³⁴ 「うまくいっていればその分を」は, hō ti eàn euodōtai の訳。「自分にう

行なわれるなどということにならずに済むように。3 わたしが着いたら、あなたがたが吟味した人々を⁶³⁵、わたしは手紙を持たせて⁶³⁶ 送り出し、あなたがたの恵みの賜物を⁶³⁷ エルサレムに持って行ってもらう積りです。4 わたしも行くのがよければ、その人たちはわたしと一緒にいくことになるでしょう。

〈旅行の計画〉

5 わたしは、マケドニアを通るときに、あなたがたのところにいきましょう⁶³⁸。6 実際、マケドニアを通るので、あなたがたのところに、多分滞在するでしょう。あるいは、冬を越すかもしれません。そうすれば、たとえ、わたしがどこへ行くにせよ、あなたがたがわたしを送り出してくれる⁶³⁹ ことになります。7 というのは、わたしは、通りすがりにあな

まくいくだけのものを」(田川訳)、「首尾よく儲けたものが何かあれば」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「そのなしうるものを」(前田訳)、「節約したものを」(バルバロ訳)、「もしも〔仕事が〕順調ならば〔そこで得た金を〕なにがしか」(青野訳)、「収入に応じて」(協会訳、新共同訳)、など。ニュアンスは青野訳がよく伝えているが、やはり説明的過ぎる。

⁶³⁵ 「あなたがたが吟味した人々を」は、hoûs eân dokimásēte の訳。dokimázō は、「吟味検証する、検証吟味する」。3：13、11：28 に変化形がそれぞれ出る。「あなたがたが吟味し〔て選んだ〕人たちを」(青野訳)、「あなたがたが適任だと認めた人たちに」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「あなたがたから承認された人たちに」(新共同訳)、「あなた方が保証する人たちに」(田川訳)、など。

⁶³⁶ 「手紙を持たせて」は、di' epistolōn の訳。

⁶³⁷ 「恵みの賜物を」は、tēn chárin の訳。この chárin の訳は様々。「恵み」(田川訳)、「好意」(青野訳)、「厚意によるもの」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「恵んでくれたもの」(バルバロ訳)、「贈り物」(協会訳、前田訳、柳生訳)、「その贈り物」(新共同訳)、など。「ご芳志」、「厚意のしるし」なども可能。いずれにせよ、前もって集めた募金のこと。

⁶³⁸ 使徒言行録 19：21、2 コリント 1：16、参照。

⁶³⁹ 「送り出してくれる」は、propémpsēte. propempō は、「旅支度を整えて送り出す」意味で、食料や金銭の提供や船便の確保など、旅に必要な準備万端と言ってもよい世話をして送り出すこと。実際、パウロは、この旅の途次コリントで一冬を越し、その際、「ローマの信徒への手紙」を執筆したものと思われる。パウロは直前に「たとえ、わたしがどこへ行くにせよ」と言って

たがたに会うことはしたくありませんし、しばらくはあなたがたのところに留まりたいと願っている⁶⁴⁰からです。主がお許しになれば、ですが。8しかし、五旬祭⁶⁴¹まではエフェソスに留まる積りです⁶⁴²。9なぜなら、わたしに向かって、大きな、しかも力強い働きのための扉が⁶⁴³開いているからです。敵対する者も多いですが⁶⁴⁴。

10 ティモテオス⁶⁴⁵ が着いたら、あなたがたのところで彼が不安にならないように⁶⁴⁶、注意しなさい。なぜなら、主の業⁶⁴⁷を、わたし同様、彼も遂行しているからです。11 だから、誰も、彼を軽んじることのないように、そして、彼を平和のうちに送り出し、わたしのところに帰って来られるようにしてやりなさい⁶⁴⁸。わたしは、彼を待っています。兄弟たちも一緒に⁶⁴⁹。 12 しかし、兄弟アポロ⁶⁵⁰については、強く⁶⁵¹ 勧め

いるが、このとき既にローマ行きを計画していたのであろう。ローマ 1：10、15：23、参照。同 15：24 には、スペインへの宣教旅行の途中ローマに立ち寄りたいという希望を、パウロは述べている。さらに、2 コリント 1：15～16、参照。

⁶⁴⁰ 使徒言行録 20：2～3、参照。

⁶⁴¹ 過越祭（ペサハ）から五十日が経過した日（ペンテコステ）の祭り。「七週祭」（シャブオット）という別称もある。

⁶⁴² パウロが、この手紙をエフェソスで書いたとする根拠となる発言。

⁶⁴³ 「わたしに向かって、大きな、しかも力強い働きのための扉が」は、 *thýra* … *moi anēōi gen megālē kai energēs* の訳。パウロは、エフェソスで自分の宣教活動に大きな可能性が開けているのを強く実感したのである。

⁶⁴⁴ フィリピ 1：28、参照。

⁶⁴⁵ 使徒言行録 16：1 に、*hyiōs gynaikōs Ioudafās pistēs, patrōs dē Hēllēnos* 「信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人の父親を持つ」とある。

⁶⁴⁶ 「不安にならないように」は、*hína aphóbōs genētai* の訳。

⁶⁴⁷ 「主の業」 *tō … érgon kyriou* は、15：58 にも与格形で出ている。「業」 *to ergon* は、「遂行する」と訳した *ergázetai* < *ergázomai* と同根の単語。

⁶⁴⁸ 6 節に出た「送り出す」同様、「旅支度を整えて送り出す」の意。パウロ同様「主の業」に励むティモテオスがコリントス滞在中もエフェソスへの帰途も、不安にならずに済むように旅支度を整えて送り出してやってほしい、とパウロは勧めている。「平和のうちに」 *en eirēnēi* が一層その意を強めている。

⁶⁴⁹ 「兄弟たちも一緒に」 *metà tōn adelphōn* が、「わたしは待っています」 *ekdéchomai* にかかるのか、「彼を」 *autōn* にかかるのかは、田川が指摘するとおり、判然としない。田川、382～383 頁、参照。

て、兄弟たちと一緒にあなたがたのところへ行くように仕向けたのですが、今行く気は全然ありませんでした⁶⁵²。良い機会が訪れたときには、行くでしょう。

〈最後の勧告と挨拶〉

13 目を覚まし、信仰のうちに堅く立ち、雄々しく、力強くありなさい⁶⁵³。14 あなたがたの万事が愛によって行なわれるようにしなさい。

15 そこで、あなたがた、兄弟たちに勧めます。あなたがたが知っているステファナスの家はアカイヤの初穂⁶⁵⁴であり、聖なる人々に対する奉仕を自ら引き受けてくれました⁶⁵⁵。16 だから、あなたがたもまた、このような人々に従いなさい、さらに共に働き、労苦しているすべての人々にも。17 ステファナス、フォルトウナトゥス、そしてアカイコスが一緒

⁶⁵⁰ 使徒言行録 18:24 に、Ioudaïos dē tis Apollōs onōmati, Alexandreūs tōi gēnei, anēr lōgois, katēntēsen eis Ēpheson, dynatōs ōn en taïs graphaïs.「アポロという名のユダヤ人で、アレクサンドリア生まれのある雄弁家がエフェソスにやって来たが、彼は聖書に精通していた。」とある。

⁶⁵¹ 「強く」は、pollā の訳。

⁶⁵² 「今行く気は全然ありませんでした」は、pántōs ouk ēn thēlēma hína nyn éltlēi の訳。thēlēma は、「…したいと思う気持ち、意欲、意志」。

⁶⁵³ 「目を覚まし、信仰のうちに堅く立ち、雄々しく、力強くありなさい」は、Grēgoreīte, stēkete en tēi pistei, andrízesthe, krataiōūsthe の訳。動詞は 4 つとも命令法。原文の語呂を重視して、こう訳した。なお、「目を覚ましていなさい」については、1 テサロニケ 5:6 の他、マタイ 24:42, 25:13, 26:38, 41, マルコ 13:35, 37, 38, 使徒言行録 20:31, 参照。「堅く立ちなさい」については、ガラテヤ 5:1, フィリピ 1:27, 4:1, 1 テサロニケ 3:8 を、それぞれ参照。andrízomai は、hapaxlegomenon。krataiōomai も新約では 4 例のみ。ただし、詩編 27:14 (LXX 26:14), 31:25 (LXX 30:25) に「雄々しくあれ、心を強くせよ」という句が、また、1 マカバイ 2:64 に「律法をよりどころとして雄々しく強くあれ」という句が出ている。

⁶⁵⁴ 1:16, 参照。

⁶⁵⁵ 「聖なる人々に対する奉仕を自ら引き受けてくれました」は、eis diakonían toīs hagíois étaxan heautoús の訳。より直訳的なのは青野訳（「聖なる者たちへの奉仕のために自分たち自身を献げた」）。新共同訳は思い切った意識で「聖なる者たちに対して労を惜しまずに世話をしてくれました」。私訳は田川訳（「聖者たちに仕える仕事を引き受けてくれた」）に近い。

に居てくれることをわたしは喜んでいます⁶⁵⁶。それは、あなたがたの居ない分をこの人たちが満たしてくれたからです⁶⁵⁷。18 というのも、わたしの霊とあなたがたの霊に彼らが安らぎを与えてくれた⁶⁵⁸からです。だから、このような人たちを、あなたがたは認めなさい⁶⁵⁹。

19 あなたがたに、アジアの諸教会が挨拶しています⁶⁶⁰。あなたがたに、アキュラとプリスカ⁶⁶¹が、彼らの家の教会⁶⁶²とともに、主にあって熱心に⁶⁶³挨拶しています。20 あなたがたに、すべての兄弟たちが挨拶し

⁶⁵⁶ 「一緒に居てくれることをわたしは喜んでいます」は、*chafrō dē epī tēi parousfāi* の訳。

⁶⁵⁷ 「それは、……からです」は、理由を表す接続詞 *hōti* の訳。また、「あなたがたの居ない分を」は、*tō hymēteron hystērēma* の訳。「あなたがたの欠けたところを」(青野訳)、「あなた方の欠けたところを」(田川訳)、「あなたがたがこちらにいないことを」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「あなたがたのいないときに」(新共同訳)。

⁶⁵⁸ 「わたしの霊とあなたがたの霊に彼らが安らぎを与えてくれた」は、*anē-pausan tō emōn pneūma kai tō hymōn* の訳。*anapaūō* は、「休ませる、休息を与える、元気づける」だが、フランシスコ会聖書研究所訳や新共同訳が採用している「元気づける」という訳語は、日本語のニュアンスとしては若干正確さに欠ける。「休ませて元気を取り戻させる」のであって、単に「元気づける」のではない。

⁶⁵⁹ 「あなたがたは認めなさい」は、*epiginōskete* の訳。*epiginōskō* は 13 : 12 にも出るが、文脈上「完全に認識する」という訳語を用いた。

⁶⁶⁰ 「挨拶しています」と訳したのは、*Aspázontai*。「よろしく」(協会訳、バルバロ訳)、「よろしくと言っています」(フランシスコ会聖書研究所訳、新共同訳、本田訳)、「よろしく申してます」(前田訳)、「あいさつを送る」(柳生訳)、「挨拶を送る」(青野訳)、「挨拶している」(田川訳)。私訳で「挨拶しています」を採用したのは、20 節前半 *aspázontai hymās hoi adelphoi pantes* と後半 *Aspásasthe allēlous en philēmati hagīoi* とで、同じ動詞 *aspázomai* に同じ訳語を使いたかったからである。

⁶⁶¹ ローマ 16 : 3 に、*Prískan kai Akylan toūs synergoús mou en Christōi Iēsoū*、「キリスト・イエスにあってわたしの同労者であるプリスカとアキュラ」とある。「わたしの同労者である」はむしろ、「わたしと共に働く」のように動詞的に訳した方が、日本語として座りが良いかもしれない。

⁶⁶² 「彼らの家の教会」と訳したのは、*tēi kat' oīkon autōn ekklēsiāi*。ローマ 16 : 5 にも対格形で出る。フィレモン 2 には、*tēi kat' oīkon soū ekklēsiāi*「あなたの家の教会」という句が出る。

⁶⁶³ 「熱心に」は、*pollā* の訳。「大いに」(田川訳)、「幾重にも」(青野訳)、フ

ています。あなたがたも聖なる接吻によって互いに挨拶を交わしなさい⁶⁶⁴。

21 (これは) わたしパウロの手になる⁶⁶⁵ 挨拶。22 もし、主を愛さない者がいるなら、呪われよ⁶⁶⁶。マラナタ⁶⁶⁷。23 キリスト・イエスの恵みが、あなたがたとともに⁶⁶⁸ (あるように)。24 わたしの愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともに (あるように)。

ランシスコ会聖書研究所訳、新共同訳、本田訳は「くれぐれも」。

⁶⁶⁴ 「互いに挨拶を交わしなさい」は、Aspásasthe allélous en philēmati hagíō, の訳。ローマ 16:16, 2 コリント 13:12, 1 テサロニケ 5:26 の他, 1 ペトロ 5:14 も参照。

⁶⁶⁵ 「わたしパウロの手になる」は、tē_i emē_i cheirí の訳。ガラテヤ 6:11 にも同じ句が現れている。通常、パウロは手紙を口述筆記していたが、結びの勧告を敢えて自分の手で認めることがあった。フィレモン 19, コロサイ 4:18, 2 テサロニケ 3:17, 参照。

⁶⁶⁶ 「呪われよ」は、ētō anáthema の訳。ガラテヤ 1:8, 9 に、パウロが伝えたものとは異なった福音を伝える者があれば、誰であれ「呪われよ」という表現が、anáthema éstō の形で続けて 2 度出てくるし、ローマ 9:3 には、「わたし自身、わたしの兄弟たち、つまり肉に基づくわたしの同族のためなら、呪われた者となってキリストから切り離されることさえずっと願っていた」という表現が出てくる。

⁶⁶⁷ marána thá の音写。「われらの主よ、来たりませ」、「われらの主よ、来てください」を意味するアラム語の短い祈願文。1 テサロニケ 4:15~17, 1 コリント 15:51~53 などが示すとおり、パウロが宣教活動を展開していた当時、キリストの再臨に対する待望は極めて強く、自分たちが生きているうちに「主はやって来る」と彼らは信じて疑わなかったのである。

⁶⁶⁸ ローマ 16:20, 2 コリント 13:13 の他, ガラテヤ 6:18, フィリピ 4:23, 1 テサロニケ 5:28 など参照。